

彼女の手紙によつて知つた。自然自宅にゐても面白くないので、一時激しかつた病氣をいゝことに自分から好んで斯んなところに來てはゐるが、貴郎の思つて居るほど自分の病氣は重くはないとも書いてあつた。母や兄は私の斯うしてゐるのを結構いゝことにして、一向構ひつけて呉れないとも書いてあつた。此處に移つて二年にもなるがこの夏初めて此處に居た幸福を感じたとも書いてあつた。今までは如何なりとなる儘になれと捨てゝおいた自分の身體であつたが此頃になつて急に自分ながら可愛くなつた。是非もう一度普通の身體に返らねばならぬと思ひ立つてゐるとも書いてあつた。何時の間にか私は齡を取つてゐた。それを思ふと口惜しくて涙が留度もなく流れる。それでも私はまだ全然の娘でゐるのだとも書いてあつた。私の態度の粗々しいのは全く境遇と病氣のためである。若しこれが貴郎の眼に著いてゐたらば見逃して呉れ、私はいつてもこれを改めることが出来るのだとも書いてあつた。

學校から歸つて來ると殆ど毎日のやうに斯うした手紙が机の上に清二を待つてゐた。それを見るごとに、痛いものにも觸るやうに清二は初めは容易に封をもよう切らなかつた。臆病な、そして口でこそ彼此云つてゐるものゝ會つて女と云ふものゝ眞性に接したことの無い彼にとつては、斯うした強い調子の手紙は却つて打ち解け難い恐怖を伴つて感ぜられた。で、夫等に對する清二の返事は如何にもおどろした、煮え切らぬものばかりであつた。

が、さういふうちにも清二の心は次第に彼女に捉へられて行つた。秋が過ぎて冬になつた。冬期休暇が近づいて來ると、彼女の手紙には必ずもう一度この海岸の冬を見に來るやうにと種々の勧誘の言葉が繰返し認めてあつた。行くともつかず、行かぬとも定らぬうちに十二月の或る朝、清二はT——港行きの汽船に乗つてゐたのである。

暖い海岸にはまだ春も立たないのに椿が咲き、梅が咲き、黄な菜の花も咲い

てゐた。或る日の午後兩人は村端れの松林まで散歩に行かうと連れ立つて寺を出た。そしてぶら／＼砂深い道路を歩いてゐると、路傍の小料理屋に土地の小學校の教員たちが忘年会とでも云ふのであらう、五六人寄つて飲んでゐたが、その前を通りかゝつた兩人を見るや否や、一度にとつと聲を上げて笑ひ出した。中には露骨な言葉で、かさに懸つて嘲罵する者などもゐた。臆病で、痼性な清二はそれを聞くと既うかつとなつて眼さきが眩みさうであつたが、それでも黙つて、振り向きもせず其處を通り過ぎた。彼女も何とも云はなかつた。そして、會て來たことのある松林の奥の浪打際に行くまで、兩人とも終に一言をも發しなかつた。

其處まで行くと清二は立ち止つたが、まだ昂奮し切つた顔をして黙つてゐた。彼女は清二の側に近づくくと、伏目に彼の顔を見上げて、おど／＼しながら唇を切つた。

「……、どんなにかお腹が立つたでせう？」

清二は言下に答へた。

「いゝえ、ちつとも！」

と云つておいて直ぐ附け加へた。

「却つて非常に快い氣持でした！」

「まア！」

彼女は眞紅な顔を擧げた。

「眞實ですか？」

「眞實ですとも、……、貴女は？」

「まア！」

と再び繰返した時には彼女は其の身體を投げるやうにして清二に縋り附いた。清二はそれをしつかと抱き留めると共に彼女の豊かな髪の中にその熱い顔を埋

めた。

「……、あの時初めて俺は彼の女の身体に手が觸れたのであつた。」と清二は酔つた者のやうに半身を起して其處の落葉松の幹に身を寄せた。

あれは一月の十三日であつた。夙うに休暇は切れたのでその日の午後いよいよ彼はその漁村を去ることにした。するとその日になつて突然彼女も歸ると云ひ出した。驚いて押し留めたが、なかく聞かないので、怪しく騒ぎ立つ心を強ひて抑へながら清二は彼女と共にT——港まで馬車に乗つた。その夜の夜航で東京へ立つ積りであつたのだ。松原の事があつて以來、打ち解けたやうで却つてその間に深い距りの出来たのを彼等は感じてゐた。そして、其後二日ほどは顔をも合はせずになつたし、逢つても妙に話が弾まなかつた。特に清二はさうであつた。さうした素振の自分を時々ちいつと見詰むる女の瞳を思ふと彼は何とも云へぬ苦しい思ひに身を責めてゐた。

數限りなく漁火の浮いたT——港の海はその夜とりわけでも春らしく風いでゐた。それを宿屋の二階から黙つて眺めながら、互ひに心を推し合つてゐたのであつたが、終に彼等はその夜の夜航に乗らなかつた。そして、その夜初めて清二は彼女が燃え立つやうな派手な長襦袢一枚になつて直ぐ自分に隣つた床に入るのを見たのであつた。續いて二日、三日、彼等はその二階から惱ましい早春の海を眺め暮したのである。

東京での密會はなかく容易でなかつた。特に母や兄や弟の眼を盗まねばならぬ彼女の苦勞は尙ほ一層であつた。

……、あの日の事、彼處の事、とひとつくまじくと思ひ起して來ると、清二はもうちつとしてゐることが出来なかつた。ふらくと落葉松の幹を離れて立ち上ると、脱いだ下駄をも履かないで木から木の間を縫つて音をも立てないやうに歩き出した。

『が、……。』

彼は思つた。

若し自分等の戀の間に幸福といふものがあるとしたら、然うして苦しんで逢引をしてゐたあの二三ヶ月間に過ぎない、と。

實際、T——港の夜以來、清二もすつかり度胸をきめてしまつた。といふより、生れて初めてさうした心持を知り、女といふものを知つたのである。無論もうさうなれば病氣も何も眼中には無かつた。彼女は即ち自分、自分は彼女、而してこの戀を成就するためには如何なる努力、如何なる犠牲をも捧げねばならないと一途に思ひ昂つた心の裡には微塵の曇りも無かつたのである。彼女だとして亦た然うであつた。斯うした兩人の會つた時、其處には唯だいつしんに燃え入つた歡喜の焔があるばかりであつたのである。

斯うした間に彼女の健康はめき／＼と恢復して來た。そして、それと共に突

然頭を擡げたのは夙うから起りかけてゐた彼女の結婚問題であつた。

その話を彼女の手紙で知ると同時に彼は咄嗟の思ひ附きから直ぐ一通の手紙を認め、書留郵便にして彼女の兄に宛て、送り出した。先づ彼女と自分との間を打ち明け、さうした不始末を詫び、自分の地位や性質をも明らかに告げた後、兩人に結婚を許して欲しいことを書いた。尙ほこれは相當の地位ある人を介して申込むが普通であるが、それはたゞ形式に過ぎないし、今の場合心も急くのでとりあへず無躰にも斯う直接に願ひすると書き加へた。

返事の無いまゝに今にも頭の上に落ちかゝりさうな不安に耐へかねて彼は追ひかけて二度三度と同じ手紙を送つた、そして、待ちに待つたその返事の代りに彼は走り書きの彼女自身からの手紙を受取つた。あゝいふ亂暴なことを爲さるから母や兄の怒りは曾つて見ぬほど激しく、そのため私は多分明日午後何時かの汽車で母に送られて郷里——彼女の郷里は中國の端れであつた——の伯父

の許へ返されることになつたと、同じく怒りや絶望に震へたやうな走り書きに認めてあつた。

暫く茫然となつてゐたが、彼はやがて覺悟を決めて立ち上つた。そして一本の手紙を書いて懐中すると直ぐ其處の小使に電話をかけて時間を問合せた後、
 × 中學の門前に駆附けた。そして其處から出て來た多勢の生徒の中から彼女の弟を見出して拜むやうにしてその手紙を托した。

その翌日は大雨が降つてゐた。時間を計つて或る停留場で清二の乗つた電車は折から満員で、彼は正面のガラス扉を開けて辛うじて身體を嵌り入れながら扉を縮るとその把手を握つて正面に向き直つて立つてゐた。そして濡れた扉の向うに立つてゐる黒い雨合羽の運轉手の脊を見るときもなく見てゐると彼は不圖自分の前の扉のガラスに自分の顔の寫つてゐるのを見出した。よく見るとその顔の兩眼には涙がいつばいに溜つてゐた。それを見ると今まで耐へてゐた心が

一時に破れて、涙は頬を傳つて流れ落ちた。誘はれたやうに後から後からと愈々愈々しく落ちて來たのであつた。

『……、さうした、人中で聲をあげても泣き兼ねないやうな一途な心持になり得たのも實にその時が俺の一生の最後であつた。』

さう思ふと、清二は急に自分の臉の熱くなるのを感じた。口惜しいともなく可憐しいともなく、當時そのまゝの昂奮した涙ともなく、熱い涙がはら／＼と零れて來た。

「居た、居た！」

急に身近に斯ういふ聲を聞いて振り返ると眞白な診察衣を着けたまゝ、友人の醫者が笑ひながら石垣の蔭から歩み寄つて來たのであつた。

清二はそれを見るとふら／＼と歩み寄つて片手をさし出した。眼から頬にか

けて、涙はそのまゝ流れてゐた。
 呆氣に取られた若い醫者は惶て、吸ひさしの煙草を投げ捨てながら自分も手を延べて無氣味さうに清二の手を握つた。
 『どうしました、……、飯も喰はないで出かけたと聞いたものだから、……、多分此處だらうとは思つてゐたのだが……。』
 この、人の善い笑ひ顔を見てゐると、清二はその前に何も彼も打ち明けて了ひ度くなつた。そして昨夜の電話の事から、糸子の事、お互ひの現在の事まですつかり喋舌つてしまつた。

……、その日の電車で〇〇停車場まで行つて兼て手紙で打ち合せておいた通りに首尾よく女を盗みとつて或る所へ隠してしまつた。間もなく彼は警察へ呼出された。二度も三度も呼出された。それを見兼ねて女は一度自分から實家の方へ歸つて行つたが、結局また彼の許へ逃げて來た。折悪くその前後が彼の學

校の卒業試験に當つてゐたが、彼はその試験所へ顔出しもしなかつた。間もなく斯うして女と同棲してゐることが知れると口やかましい同郷人の忠告となり彼と郷里の親との絶交となつた。

『……、其頃僕の親達は勝手に自分の嫁を決めて田舎で俸の卒業を待つてゐたのです。それをさう無理とも思ひませんでした。何しろその時の僕は自分から進んで親を捨て度いやうな氣持がしてならなかつたのです。』

清二は笑ひながら話の途中で云ひ足した。

さうして罪人のやうにして兩人が縮み屈んでゐる上へ襲つて來たのは貧乏であつた。その日から自分で食はねばならぬ事であつた。無論その時の清二の頭には學校など失くなつてゐた。そして一生懸命になつて職業の口を探してゐた。其處へまた迫つて來たのが彼女の病氣であつた。次いで彼女の兄の發病であつた。

「……、同じ病氣になつたことが妹に對する兄の心を和らげまた同じく妹の心をも和らげたのです。そしていま考へれば可笑しいが、然うして今までの兄と仲直りをしようとする女の態度が當時の僕には憎くてくくなりませんでした。で、随分思ひ切つて意地悪く苛めました。何處に自分に斯んな残忍性が潜んでゐるのかと自分ながら折々は不思議にも思ひましたよ。」

それでも、半年ほど兩人の同棲は續いてゐたが、彼女は次第に清二を疎んで自身の兄や母を慕ふやうになつた。清二の眼を盗んでは兄の入つてゐる病院や母の許を訪ねてゐた。清二もそれを知つてはゐたが、倦み易い彼は、——馴れない激しい労働に勞れ果て、すつかり意氣地を失くしてゐた彼は、もうそれほど執念深く彼女を苛むことをもしなかつた。いや、もつと深く立ち入つて考へれば、清二はもうその時、戀といふもの、女といふものゝ重苦しさに耐へられなくなつてゐたのかも知れなかつた。

さうした彼の状態は恰爾な彼女の眼によく映つてゐた。それが時々彼に對する憐憫の心となることもあつたが、多くは抑へ難い侮辱や反抗の念となつた。そして、急に飛び込んだ斯うした實の活の激しさが、發作的に彼女を放縱にしたやうにも見えた。病氣が募つて幾日も床に著くやうになると、清二は先づ醫療の費に差し支へた。それを彼女は口汚く罵りながら、兼てから自分の兄弟のやうに親しくしてゐる醫者があるからそれに頼まうと云つて自分で呼寄せたのが大野といふ若い醫學士であつた。清二は程なく彼が彼女の兄の入つてゐる病院に務めてゐることを知つた。そしてまた偶然にも清二の親友の一人と同郷人で所謂文學愛好者の一人である事を知つた。

そのうち、終に兩人はさうしたお互ひの状態に耐へられなくなつて、誰からともなく別れ話を持ち出したのであつた。そして綺麗に手を切つてしまつた。「それからでサ、……、さうなつて了ふと今までの總ての事が何だか埒もなく

馬鹿々々しく見えて来て、丁度その反動でもあるかのやうに僕は急に今まで知らなかつた自由な世界に飛び込みました。その結果がつまりこれでサ、ヒツヒ！」

泣く様な聲で笑ひながら彼は手を擧げて自分の頭の毛を掻つた。浸み入つた病毒のために、まだ抜け止らない髪は容易く彼の指さきに黒々と掻られて来た。

午後の四時頃、傾いた夕日を受けて清二はまた朝と同じ様に停車場の材木の蔭に佇んでゐた。何かの都合で昨夜の十時に乗り遅れて今朝六時に立つ汽車に乗らないとも限らぬと思ふ掛念があつたからである。彼是とは疑ふものゝ、清二はまだ糸子が何の要もないのに自分を愚弄するほど阿婆擦れてゐると思へなかつた。

汽車は着いた。大半の旅客は改札口を出終つたが彼女は見えなかつた。われ

知らず材木の蔭から出て改札口に近づいてゐた清二は、ずつとその一群の終りの方に、寧ろ意外な、すなりとしたその姿を見出した。そして、商家の丁稚らしい男に首を傾げて何かものを訊きながら改札口を出て来る彼女の姿や横顔を見詰めて、相變らぬその美しさに何とはなく清二は胸を踊らせた。

ツイ眼の前に懐中手をして突立つてゐる清二に氣の附いた時、彼女は喫驚した顔をくづつして笑つた。清二も笑つた。

『まア！』

と云つたまゝ、澄んだ大きな眼を見張つたが、すぐ傍に不審相に立つてゐる先刻の男を振り返つて。

『難有うございました。迎ひに出てみてくれましたから……。』

と丁寧に首を下げた。

清二は黙つて先に立ちながら、兼て考へてゐた様に取りあへず停車場前の宿

屋に入つて行つた。

座敷に入ると直ぐ清二はまだ坐りもせず彼女を顧みた。

『如何したのです！』

彼女は急に返事をしなかつた。コートを脱いで衣桁に懸けて、一度欄干のついた廊下に出て丁寧に著物の袖や裾をはたきながら座敷に入つて來るとまだ其儘清二が突立つてゐたので、眼と眼と合ふと急に眩しいやうにそれを外らして、其處に坐つて了つた。

女中が眞赤に焼つた炭火を持つて來た。

清二も所在なく座についたが、俯向いたまゝ執念く口を噤んでゐる女を見ると、既う持前のいら／＼さが込みあげて來た。

何か烈しい皮肉でも云つてやらうかと顔を擧げると、女は袂を顔に當てゝ泣き出した。

『如何したといふのです、何か起つたのですか。』

階子段を上つて來る女中の足音を聞くと彼女は急に顔から袂を離したが、茶や搔卷を置いて出て行くのを見送ると、

『随分ネ、貴郎は！』

咎めるやうに低聲で斯う云ひながら、まだ涙の干ぬ眼を眞正面に清二を見詰めた。

『何故です。』

『斯んな所まで逃げなくつたつて可いちアありませんか！』

『逃げはしません。唯だ來たかつたから來たのです。』

『妾に隠さなくつたつていゝでせう。』

『何を云つてゐるのです、……、隠すも隠さないも、もうそんな必要は無い筈です。』

彼女はまた黙つて下唇を噛み締めた。これは心の焦立つ時の彼女の癖で、よく血を出した事があつた。やがて、俯向いてゐる彼女の長い睫から涙が落ちて来た。

清二はまた暫く石像のやうな女の睫から落ちる涙を黙つて見詰めて居ねばならなかつた。一頃より目立つて寒れた横顔や肩のあたりを眺めてゐると、耐へられない憐れさを覺ゆるのだが、それと共にまた自分にも解らぬ憎惡の念も湧いて来た。が、餘りにそれが永く續くので、終に彼も我を折つた。

『まア、話は後にしませう、……、如何です、風呂にしませんか、疲れたでせう、身體は何ともありませんか。』

『どうぞお先に。』

聞ゆるか聞えぬ位の女の聲を聞き流して彼は掻巻を持ちながら部屋を出て行つた。そして、障子を締めようとして、不圖振返ると惶しく袂を顔に押し

當て、其處に突き伏す女の様子が眼に入つた。

其夜の食膳に清二は二月あまり斷つてゐた酒を取り寄せた。久しぶりの酒は直ぐ彼を酔はせてしまつた。

風呂から出ては清二はもう何も彼女に訊ねなかつた。誰だ彼女自身、または兄の病氣の話、續いて大野の話などが出た。大野、と云つた時、清二はそれとなく瞳を動かして彼女を見たが、彼女も微笑して清二を見返した。大野の話の出ることに清二が險しい顔をするのが常だからであつた。が、如何考へても彼の疑つたやうなことのありさうな風もなく、唯だ案の定彼女は大野に逢つて初めて清二の所在を知つたのであつた。大野はその同郷人の伊賀から偶然この事を聞いてゐた。他には一切秘してゐたが、唯だ親友の伊賀にだけは他に必要もあつて清二も居所を知らせてあつたのである。

汽車の疲労が出たものか、一緒に酒にでも酔つたやうに彼女もうつとりとしてゐた。顔の血色もよくなり、身をくづした肩にも手にも足にも軟かさが満ちてゐた。

容易に盃を擱かぬ清二をちよいくと眺めながら溜息のやうにして彼女は云ひ出した。

「駄目ネ、……種々話し度いことがあつて来たのだけれど、斯うして逢ふと何も既うよう云へない。」

直ぐには清二は何ともよう答へなかつた。

「然し、理由は何だか知らないが、よう来ましたネ、何だか僕もたいへん嬉しくなつた。この町は駄目だが、明日は日——といふ温泉に行きませう。此處から一里ほど山を登るのですが、なアに、山と云つても平らな野みたいなものです。其邊一帶に白樺や落葉松の林があつて其處の温泉宿からはこの廣い裾野が

一面に見えます。盛りは過ぎたが、まだ秋草が一面でせうよ。折々あなた的事を空想しながら其處を歩いたものだつたが、たうとうそれが實現されてしまつた。アハハ……。」

見ると、女はまた泣いてゐた。

「駄目、妾はまた明日歸らなきアならない！」

「え？」

清二は驚いた。

「嘘でせう！」

「いゝえ、眞實！」

「何故です？」

「何故でも、……もう何も訊かないで下さい、理由は無いのですから……、兄に隠れて来たのですから……。」

女の聲はよく聞えなかつた。
清二は、然し、女の歸るといふのを信じなかつた。いつものやうに唯だ拗ねて見るのだと思つた。そして却つて久しぶりに眞實の彼女を見るやうな氣がして可憐しかつた。後は兎もあれ、此處に來てゐる間だけでも出来るだけ慰め撈つてやりたいものだと思ひ込んだ。
膳を下げると清二は一應病院の友人に逢つて來る必要があつた。女の來たことだけは電話で一寸云つて置いたが、其時清二は手許に一錢の小遣も持つてゐなかつたのだ。

三十分ほどしてそゞくさと病院から歸つて來ると、座敷にはもう一つの床が敷かれて、寢衣に著換へた女はその枕許で小さな化粧道具を前に向うむきになつて顔を直してゐた。清二が入つて來ても、お歸りなさいと細く云つたまゝ振り向かうとしなかつた。

それを見ると清二は竦んだやうに敷居際に立ち止つた。そして我ともなく惶しく手を拍つた。

驚いた彼女は狼狽へて振り返つたが、すぐまた向うむいて、立ち上つた。そして、手速く化粧道具を押し隠してから、

『どうしたの？』

と身近く寄つて首を傾げながら訝つた。白粉の匂つてゐるその顔を清二は見ることが出来なかつた。

女中が來ると清二は、床をもう一つ敷けと云ひつけた。

床が敷かれると、同じく其處にぼんやりと立つてゐる女を僅かに見やつて、低い聲で云つた。

『糸子さん、僕はいま……、わるい身體になつてゐます。わるい病氣です！』
それを聞くと女は、つと身を交はして障子をあげて廊下へ出た。

清二も氣の抜けた様に、やがてその後に従つた。
戸外は冷い月夜であつた。
女は欄干に兩手をかけて、それに顔を押し當てたまま、固くなつて蹲んでしまつた。

清二も何ともよう云はなかつた。寒さうな彼女の肩に手を置くことすらよう爲なかつた。

明らかな月夜の天にはA——火山の噴煙が眞直ぐに黒々と昇つてゐた。

それから五日か六日目であつた。清二は一通の手紙を受取つた。それは思ひも寄らぬ彼女の兄から送られたものであつた。いまだ會つて斯ういふこと無かつた人からなので、清二は驚いて封を切つた。そして更にその文面に驚いた。五六日前から妹の行方が解らなくなつたが、貴下の方に行つてはゐまいか、

よし行つてゐなくとも彼女の事に就いて篤と御相談したいことがあるから、出来るなら歸京して貰へまいかと、極く簡單ではあるが、案外にも打ち解けた口調で認めてあつた。

清二はそれを握つたまま、暫くは呆然として果してこれが眞實であらうか、眞實この人から出たものであらうかとさへ怪しまれた。あの翌朝、殆ど喧嘩の様にして振り切つて歸つて行つた女がまだ家に歸らない……、とすると一體彼女は如何なつたのであらう。何處へ行つたのであらう。

何の要領も與へずに唯だ遙々一夜來て泊つただけで歸つて行つた女の事が、また新しく清二の不審を喚び起した。平常と全然違つてゐた彼女の舉動、初めから終りまで殆ど泣き續けてゐた様子なども續いて思ひ起された。どんな場合でも、他人の前で泣顔ひとつ見せたことの無かつた彼女が、殆ど正體なく泣きくづれてゐた汽車の窓の顔さへ眼に見えて來た。そして、さう思ふ清二の面前に

はあり／＼として大きな凶事が浮んで来た。清二は咄嗟の間に立ち上つて歸京する決心をした。

汽車中段々と不安の念に驅られてゐた清二は、東京の停車場に著くと直ぐ○病院の彼女の兄に電話をかけた。そして、その返事を聞くと直ぐ其處に赴いた。

初めて見る白い臥床の上の彼女の兄は、想つてゐたより一層寒れてゐた。目鼻立に似た所はあるが顔も身體も妹より小さい様に見えて、齡よりすつと老けてゐた。この人を永い間苦しめてゐたのだと思ふと、いろ／＼云ふべきことを考へて來たのであつたが、清二もはき／＼とは口が利けずに、たゞ頸が下げられた。

過去の事に就いては彼は何とも云はなかつた。清二の詫を云ひ出すのを手振つて制した。そして細い、はつきりした聲で云つた。

『妹が参つたでせう。』

『え、見えました。そして一晩だけ泊つて、その翌日、早くこちらに歸られた筈です。』

彼はそれを聞くと、黙つて眼を瞑ぢた。それが清二の云ふ事をば一々承知してゐる様子に見えた。清二はまご／＼しながら訊ねた。

『そして此方へはまだ歸らないんですか、あのまゝすつと歸れば××日の夕方には著かれる筈です。』

兄は尙ほ黙つてゐた。苦痛を忍ぶ様子があり／＼とその干乾びた顔に見えてゐた。氣を焦ちながら清二は空しくそれを眺めてゐるよりほか無かつた。

やゝ暫くして、

『實は貴下に種々御相談したいことがあるのですが、生憎く今日母が來てゐませんので、……濟みませんが二三日中にもう一度來て頂けないでせうか。』

『え、承知しました。私は當分此處に居ますから……。』
 と友人の伊賀の番地を認めて置いて、清二はその室を出た。そして、二階を降りると直ぐ通りがかりの看婦を頼んで大野に面會を求めた。
 さう思つて見れば如何にも好人物らしい大野の大野は、清二を見るなり、
 『如何でした、K——町は？……、行つたでせう！』
 と笑つた。そして直ぐ、妙な事から電話の事が露れて、ツイ貴下の事を兄さんに打ち明けましたよと、笑ひながら眉を寄せた。
 『ところが……。』
 とまた續けて、

『用心しないといけませんよ、出来たらしい、新しいのがー』
 清二は苦笑しながら、強ひて心を落ち着けて、その所謂「新しいの」に心當りは無いかと訊いた。

大野もそれをば知らなかつた。上では何か心當りがあるらしいが、……何しろ氣の毒なのは彼處だ、とてももう永いことはあるまいに、と云ひながら二階を指さした。

伊賀の宅に行くとき突然だつたので彼等夫婦は驚いて清二を見たが清二はまた更に驚いた。彼等は糸子がK——町に清二を訪ねて行つたことを知つてゐた。そして今まで清二と一緒に居るものだとのみ思つてゐた。

『何の氣なしに大野に君の事を喋舌つたのだ。すると間もなく糸子さんがやつて来てK——町に君の居るといふのは眞實かと訊くから、知られた上なら仕方がないと思つて、眞實だと云つてやつた。そしたら、是非至急に逢つて置きたいことがあるからこれから其處まで訪ねて行く。それで衣服を著換へて出ては宅で怪まれるから僕の細君のを一寸貸して呉れと云つて、此處で著換へて行つ

たよ。』
聞くごとに清二は驚いた。彼女は衣服の事は勿論、伊賀の名をすら殆ど唇に
しなかつた。

急には返事も出来なかつたが、其夜酒が出てから清二は一伍一什を、ことに
今日病院で見聞した一切を友人夫婦の前に打ち明けてしまった。夫婦も驚いて
顔を見合せるよりほかは無かつた。

夜遅く枕についても清二はなかく睡れなかつた。そして襖越しに聲をかけ
て見た。

『ねえ君、一體何と思つてそんな場合に僕を訪ねて來たのだらう。』

『さア、……。』

友人も眼を覺してゐた。

『逢つたところで、それこそ用談らしいことは一口も云はなかつたのだからね

え。』

『さア、……。昔の事でも懐ひ出したのぢア無いか。……。現在にやつてゐる
事と昔の事とが自然に思ひ較べられて、そしてふらく出懸けて行つたのぢア
無いか。まア謂はゞ自分の初恋に別離を告げに行つたやうなものかも知れぬ
よ。』

或はさうかも知れぬと清二も思つてゐたのであつた。そして、衣服を借りに
行く位だから、姿を隠すやうになつたのはほんの其場の思ひ立ちで、ことに
自分が意外な病氣に罹つてゐた事などが、反動的にさうさせたのであつたかも知
れぬと當夜の事を心の裡に思ひ出した。それにしても伊賀の事位は話し出
す機会があつたらうにとも訝かられた。衣服の事があるから、と例の鼻柱の強
い見榮坊をも思ひ浮べた。

相談したいことがある、といふ裏へ果てた彼女の兄の打ち解けた言葉が不思

議な位に強く清二の心を捉へてゐた。若しや改めて結婚して呉れといふのではあるまいか。若しさうであつたならば自分は如何なる處を執る可きであらう。たとへ何と云つても彼女を斯うした境地に伴つた同伴者は確かに自分であると清二は胸の鼓動の高まるのを覺えながら眼を見開いて天井を見詰めてゐた。

『結婚、結婚……』

清二は寝がへりをしながら、今度は自分自身の事を考へ始めた。過去のこと、現在のこと、更に未來のこと、殊に彼は自身の頹廢し、衰弱した現在をよくよく耐へ難いものに思つてゐた。とても此儘ではゐられない、サテ此處から脱け出すとすると、取りあへず先づ世間並の生活が彼の眼に映る。世間並の生活、静かな、疲れた様な生活……。

『結婚、なるほどそれも此際いゝかも知れない……』

而して夫婦になつた後の糸子のまぼろしがほんのりと彼の心に來て宿つた。

空想がちの彼は、或る宗教家たちの傳記などにでもありさうな、悔い改めた、新しい寂しい生活がかすかに思ひ浮べられもした。

『が、……。』

彼は自身でも驚く位一種の衝動を感じて、息を呑んだ。斯うした感傷的心持に次第に沈んでゆきつゝあつた時に、不圖眼の前に描き出されたのは、現在の、今夜いま頃の彼女の面影である。何處か自分の知らぬ所に、知らぬ男と隠れ忍んでゐる彼女の姿である。さういふ場合、男に接してゐる彼女の舉動は生々しい経験から、清二には鮮か過ぎる程十分に想像し得らるゝのであつた。

點けすてた電燈が友人夫婦の貧しい生活を露骨に照らし出してあか／＼と壁際に點つてゐる。

『矢つ張り駄目だ、俺の飛び出す場合ぢア無かつた。今になつて人情の、義理のと、云ふのも恥しい位なものだ。終つたものは要するに終つたまゝに任せ

て置けばいいのだ。一體どんな気で俺は斯んなところへ飛び出して来たのだらう！」

彼はすゝり上ぐる様な氣持で自身を冷笑しながらともすれば湧き立つて来る自分の心を力めて抑へつけようとした。そしてその方便でもあるかの如く今朝立つて来た裾野の古驛を心に描いた。其處の暗い、冷い病院を思ひ浮べた。窓から見ゆる火山の煙を想像した。

「彼處が……！ 寝られるだけおとなしく彼處に寝て居ればいいのだ。何も強ひて灰の中を掻き廻して燃えさしの煙を見る必要はないのだ。さうだ、早速また明朝彼處へ歸つて行かう！」

まじく〜と彼は天井を見詰めながら、サテ其處までの汽車賃をどうして作つたものだらうと考へ始めた。

元旦記

うすく門を叩く音に気がつきながらまだはつきり覺めずに居ると、やがて妻が出て行つて應待してゐる。程なく門はまた締つた。

『何だ』

『小荷物です、大阪の大島武男さんから……』

『ほう、何だ』

妻は隣室で手紙か何か読んでゐるらしく、

『おさかなですつて、……味噌漬で、この元日から三日頃までがたべ頃なんださうです』

この人からは昨年も恰度今日あたり妹さんの手料理だといふ蒲鉾を貰つた事

がある。

『細野さんのも、さうしてみると小包なんですネ』

『らしいネ』

私も恰度その事を考へてゐたところであつた。上總の細野春翠君から自分の如でとれた百合根と牛蒡とを送つたからといふ手紙を受取つたのはもう三日も前である。それでまだ荷物が届かない。その手紙よりもう一日前日向の越智溪水君から猪肉を送つたといふ便りを貰つて、毎日郵便局に注意してゐるのだがまだ配達して来ないでゐるのだ。此頃この土地の郵便局と來たら實に無責任で特に小包などは三日四日必ず局に留め置くものらしい。細野君のは近國だしするから必ず鐵道便だらうと思つてゐたのだが、斯う遅れるところを見れば矢張り小包と見える。

眼が全然覺めた。

『何時だ』

『十二時半です』

妻と姪とは隣室を掃除してゐる。

掃除も済んで、兩人ともこちらの室に來て床に入つた。ふと氣がつくと鐘が聞える。二ヶ所か三ヶ所で鳴つてる様だ。

『鳴つてる様だネ』

『え、もう先刻から』

興味深く聽いてゐたらしい妻の返事を聞きながら私はツイ側に寝てゐる加藤東籬君を起した。この二十九日に突然彼は津輕から上京して來たのであつた。熱睡してゐたらしい彼は容易に返事をしなかつたが、私が『オイ、起きないか、除夜の鐘が鳴つてるよ』

といふと、漸く『え、え、……』と蒲團の中から首を出した。氣の毒に、この

珍客にも私の家では家族と雑魚寝をして貰つてゐるのだ。

『聞えるだらう、ソレ』

『アー、聞えますナ』

次ぎ、次ぎと、いかにも静かに響いて来る。それぞれの記憶を思ひ浮べながら私には久しぶりにこの鐘を聴く様な気がしてならなかつた。やがて、友も、妻も、姪も、みな睡つて行つた。

私は次第に心の冴えてゆくのが感じた。そして程なくその鐘の音も断えてしまつた。『終つたナ』と思ふと自然に私は半身を起してゐた。そして左右に睡入つてゐる人たちを見廻しながら、静かに起き上つた。先刻まで起きてゐた妻たちの埋めて行つた茶の間の火鉢の火をかき起してから私は顔を洗つた。そして何といふ事なく机を電燈の真下に持つて来て、その上に原稿紙を擴げた。が、やがてそれはホンの一時の昂奮で、頭は昨日來の雑多な用事でひどく疲れてゐ

る事に気がついた。と、思ふと私はまた机を舊の所にしまつて、今度は酒の用意を始めた。家中ありたけの火鉢（と云つても二つ）に火を山の様におこして双方に湯をしゆん／＼沸かした。食卓を出したり、座布団を配置したりして、先づ妻を起した。午前の二時である。一時間は彼女も睡つたわけだ。續いて姪が起きて来た。

『睡ければ俺たちの出かけたあとでまた寝直せ』

『いゝえ、睡くはありません』

寝惚聲で云つてゐる。

『頂いたのを早速開きませうか』

『ア、いゝネ、恰度よかつた』

正月らしい雑多な食物の擴げられた卓上にまだ桶のまゝの先刻の大島君からの贈物が持ち出された。その間に私は加藤君を起した。

酒の匂ひが室に流れる頃、その魚の焼けつく匂ひも起つて來た。

『元日だ、過したまへ』

加藤君も何時になく盃を重ねてゐる。

『いま三時だ、あと二時間は飲んでい』

『フ、、そんなには飲めません』

妻も盃に唇をつけてゐる。そして、

『斯んなお正月をしてゐると、今年は何だかいゝ年らしく思はれてなりませんね』

などと云つてゐる。

何彼と云つてゐるうちに矢張り五時まで飲み續けた。急いで雑煮を喰つて、加藤君と共に家を出た。戸外はまだ闇で、月が寒々と残つてゐる。大晦日といひ元日と云つても斯んな郊外の事で、犬が遠くで吠えてゐる位、昨夜といひ今

朝といひ實に静かなものだ。兩人は酔つた身體を擦り寄せて津輕節を低聲に唱ひながら電車通りに出た。大手町までは空いてゐたが、其處で乗換へると電車は恐ろしいこみやうだ。みな深川の不動様への初詣りだ相だ。日本橋まで來ると終に私などは人と人として押し上げられて足は下を離れてしまつた。幸に結び立ての高島田が三人同じやうに身體の近くにもがいてゐるので僅かに眼と心とを慰める。永代橋の袂で降りる筈なのだがこの始末で身動きも出來ず、たうとう不動様の前の停留場まで持つて行かれてしまつた。

其處から駈足で永代橋まで戻り、大川に沿うて汽船發着所まで馳けつけると、何の事だ、けふは三崎行きは休航だ相だ。加藤君が津輕の眞中に生れてまだ何處も他國を知らない人である事を知つてゐるので、今度の上京を幸ひ、少し暖かい國の海岸の冬でも見せ度いと考へて、けふ元旦早々三崎行きを企てたのであつた。椿の咲いてゐるのも、梅の咲いてゐるのも（北國の梅は違ふさうだ）まだ見た

事がないのみならず、こゝ三四ヶ月は全然雪の中に埋つてゐなければならぬといふ人に三崎あたりの此頃の日光や、海のひかりや、椿や、水仙や、菜の花の咲き盛つてゐる所を見せたらどんなに驚くだらうと思はれたのである。

兩人はそれから東京停車場へ行つた。横須賀行の切符を買つて、陸路も三崎へ行かうといふのである。汽車は出た。大きな市街の上を渡る汽車の窓から見る大正七年一月一日午前八時頃の日光は煙りながらも晴れてゐた。

途中鎌倉下車。鶴ヶ岡八幡、長谷の大佛、観音と見て歩く。観音堂の上から海がよく見えた。

「ア、咲いてる、咲いてる」

といふので不圖振返ると一本の椿の老樹の下に立つて加藤君が口を開いて仰ぎ入つてゐるのである。これが四十二歳厄年の人で、十七歳とかの息子のある人と如何して思へやう。この静かな友の姿を見てゐると、私は漸く東京を離れ

て旅に出てゐる様な、しみじみとした心地になつて来た。

「ネ、加藤君、もつと遠くへ行かうよ、これからのろくろくと三崎まで歩くのがいやになつた、いつそのことこのまゝ藤澤へ出て、それから汽車で沼津まで行かう、そこからなら富士もいゝよ、そして明日海を渡つて伊豆の土肥へ行かう、

伊豆はまた三崎とは一段だ、其處には温泉もあるし、それから……」

加藤君には三崎が何處か、土肥が何處か見當はつかないのだ。言下に行く事にきめる。さうするともう大塔宮の土牢だの江の島だのを見て廻るのが面倒臭く、直ぐ電車で藤澤に出た。其處から汽車、國府津あたりから案の如く富士が正面に晴れて来た。やがてその裾野を越えて沼津驛下車、街を突き切つて狩野川の川口の宿屋に著いた頃は程よい黄昏であつた。通された室の前の広い入江には明日の朝土肥に渡るといふ汽船が静かに浮んでゐる。

線路のそば

日向國宮崎町にて、H—君。

まだ通知もしなかつたが、この五月の九日にまた引越した。いはゆる東京の郊外で、小さな丘の中腹、疎らに立ち並んだ楢の木立をさし挟んでツイ傍を山の手線の鐵道が通つてゐる。その反對の側には癡兵院の鬱蒼たる森が横つてゐる。

前から越したいとは思つてゐたが、斯んなところへ來やうとは全く意外であつた。しかも突然のことであつた。八日の午前、久しぶりに妻や子供を連れて穂の出た麥畑でも見せてやらうと、ぶら／＼散歩にやつて來た。そして通りか

かつたのがこの丘で、不圖見ると或る一軒の空家にいま引越して來たばかりの荷物の置いてあるのが眼についた。前から越さうと思つてゐたところではあつたし、特に眼が速かつたのかも知れない。すると、荷車や家具などが雑然として置きすてゝある板塀續きのその隣家の門に貸家札の張られてあるのが直ぐまた眼に入つた。妻を見返ると彼女もそれに氣がついてゐたらしい眼をして私を見返へした。

『見て行かうか』

『エ、見て行きませうよ』

斯んな風で、直ぐ其場で借りることにきめてしまつた。元來いまのやうに雜誌發行の仕事などやつてゐると、市内にゐないかどうかどうしても不便で、越すにしても是非市内の、しかも郵便局の近くに越したいといふ希望で探してゐたため不快でたまらぬ今までの金富町の家にもツイぐづ／＼と腰を据ゑることになつ

てゐたのだ。市内で、郵便局の近くで、日當りがよくて、四間か五間で一寸した庭などあつて、それで家賃が九圓か十圓、たかく十二圓位ゐの所を見附けようといふのだからなかく無い。實はもうその、家さがしにうんざりしてゐたのだ。

初め塀から入つて見ると、裏に三坪ほどの庭があつて、部屋は六疊、四疊半三疊、二疊、で六疊と三疊の兩部屋が庭に面して、南七分西三分位の見當で日を受けてゐる、家作もまだ新しい。井戸は勝手の手前、その日越して來てゐた家と二軒だけの専用となつてゐる。それに四邊が木深く、極めて閑靜だといふ様なことから急にそんな邊鄙なところへ越して來ることにきめたのだらうが、自分ながらよく解らない。市内に絶望した結果、自暴氣味で斯うしたものと考へられぬでもない。また市内に住むといふのは、仕事の上からの止むを

得ぬ要求なので、内心では決してそれを欲してゐたのではない。實はそれに耐ふべく、餘りに僕は疲れてゐたのだ。それこれが一氣呵成的に、斯うした思ひがけない郊外中でも不便な、而して靜かな所へ移り住むことになつたのだらうと思ふ。兎に角、僕はいまそれで満足してゐる。

電車はそれほどでないが、汽車の通るたびに夥しい音響の襲つて來るのが引越して來た當座の最大苦痛であつた。知つてゐるだらうが、山手線を通る汽車といつたら現今は貨物ばかりで客車はない。その貨物もまた無闇と長く、時には三四町にもわたるかと思はれる位のすらすら走つて行く。それが前に云つた楢林一つを距てゝ走るのだから眞實夥しい音だ。音ばかりぢやない、土地が揺れるのだ。或る午後、庭いぢりをした泥足のまゝ縁側に腰かけてぼんやり煙草を吸つてゐると、例の貨車がやつて來た。恐しい煙だと先づ遠くから來るその煤

煙を眺めてゐたら、やがてゆさくと縁が揺れ始めた。見るともなく見てゐると、庭のはづれにすつと植つてゐる薔薇の青葉がさかんに揺れてゐる。幾つも咲いてゐるなかの一つの花などは、折も折、その時こぼれ落ちてしまつた。

『あれですものねえ！』

といふ聲がしたので氣がつくと、妻も隣室の三層でこの汽車を眺めてゐたのだ。

煤煙も折々室内にやつて来る。汽車ばかりでなく、丘の頂上には電燈の球を作る工場があり、麓の水田を埋めた所には護謨製造の工場があるので、それらの煙筒からもやつて来るやうだ。静かに読み入つた書籍の上などへふうわりと舞つて来られると、まつたく意外のものを見る思ひがする。一寸見ると四邊は眞實樹木のみ茂つてゐるやうな所なのだからネ。

来る早々氣になつたのは、矢張りこの線路だ。ソラ、君のまだ東京にゐる頃は漸く這ふことの出来る位だつた子供がいまは五歳で、しかも並はづれた大柄

の子で、悪戯ざかりとなつてゐるのだ。これが線路に出て行かねばいゝがと、そればかりを氣にして口を酸くして警めてゐた。所が二三日前のことだ。もう夕方、僕はよそから歸つて来て疲れた身體を座敷に投げ出して新聞を読んでゐた。するとツイ近くで二三度けたまましい汽笛を鳴らして来た電車があつた。蟲が知らせるといふのか、その汽笛を聞いた時すら何やら胸騒ぎがしたのであつたが、やがて直ぐその電車がギーといふ音をして停つてしまつた。と思つた時は僕は玄關から飛び出してゐた。そしてその電車の方へ馳けつけようとその楯木の側まで来ると、二人の車掌が紺飛白の筒袖を著た子供を逆さに抱へて線路から降りて来ようとしてゐるのが眼についた。てつきりもうやられたことだと僕は思つた。血や手や足がまぼろしとなつて眼前に渦巻いた。小さな溝を一氣に跳び越えてその楯木にとび込むと、それよりもやゝ荒い紺飛白を著た僕の子供は其處の一本の木の下に蒼くなつてすくんでゐた。車掌に抱かれたのは

この子の友達でツイ近所の子供であつたのだ。いきなりそのすくんでゐるの、手を取つて私は引き立てた。そのうちに今一人の子供は「驛に連れて行け」といふ一人の男の腹立聲と共に急に電車に連れ込まれてしまった。息の切れるやうな泣聲が聞えてゐたが、電車は進行を始めた。僕はわれ知らず自分にすがりついてゐる子供の頭を力まかせに殴りつけた。二度三度と続けざまに子供を楯の根もとの笹の中に倒れるまで殴りつけた。この子が生れて初めてのことである。まつたく掌があとで少し痛かつた。

夏の初めになればやつて来る苗賣の聲を君は覚えてゐるだらう。今年僕は初めてあれを呼びとめてみた。常に貧しい惶しい生活をしてゐるので、その賣聲をば愛してゐながら、それを買つて植ゑて見ようなどと曾つて考へてみたこともなかつた。今度の家には幸に庭がある。植つてゐたのをば前の人を持つて行

つたと見えて、掘り荒らされたまゝになつてゐるので是非其處に何か植ゑねばならぬとは思つてゐたのだ。

たうもろこし、なす、きうり、いんげん、ふぢまめ、しそ、たで、ゆふがほ、かなな、ほうせんくわ、てつせん、をみなへし、しをん、ちどりさうなどといふのを二三度にわたつて買ひ込んだ。それから金物屋に出かけて小さな鋤のやうなものを買つて来て蹴足になつて硬い庭土を起し始めた。そしてそれを細かに揉み碎いて、小さな畑のやうなものを三つも四つも作つて、みんなそれに植ゑ込んでしまつた。枯れたものも二三あるけれど、大抵はついたやうだ。

朝夕尻端折でそれに水をかけてやつてゐる若山牧水の姿を想像することは、或は君の困難とするところだらうかと思ふ。

なまけ者の癖に朝早いのは前からのことだつたが、此處に来て一層早くなつ

た、大抵四時か四時半、五時には必ず起きてゐる。起きて用をするのではないが、太陽のまだ輝かぬ間の静けさとやはらかさとがいまの身には何よりうれしいからなのだ。自分で汲む井戸の水も、それを庭の畑にそゞくのも、または煙草をくはへてひそかに門を出てゆくのも、みなうれしい。

例の櫓をぬけて線路に出ると、其處はかなり高い土堤になつてゐるので、人家と森と入り混つた武蔵野がすうつと見渡される。この頃はそれがみな瑞々しい青葉となつてゐるので、一層へへ。この邊に多い白鷺が、幾つも／＼空を啼いて通る。あの眞白な、瘦せた姿は愛らしいものだ。霧が次第に晴れて來ると遠い地平線の方に低い／＼山脈が見え出す。思ひも寄らぬ空に富士山が輝いてゐるので驚いたこともあつた。山は、夕晴の時にも見える。

癡兵院の森もいゝ。いゝといふより何やら不思議の森だといふ氣がする。此處ばかりはそれこそ日がな一日かすかな物音ひとつ起つたことがない。常にし

いんとして終日其處の梢からは雫でも落ちてゐるやうに感ぜらるゝ。注意深く其處此處の籬根から奥を覗いてみると、深い木立の間に、いろ／＼な建物が立つてゐるやうだが、僅かに玻璃窓が光つてゐるきりで、矢張り何の物音も、動いてゐる影もない。三萬坪からあるだらうが、まつたく此處だけ氷つたやうに周圍と境を異にしてゐる。晝は深山らしい種々の鳥、夜は鼻が毎晩啼いてゐる。噂だけかも知れないが、此處の奥には手も足もまるつきり無くて、僅かに甕のやうなものゝなかに入れられて生きてゐる人も居るといふ。

けだるさを叱り叱りて起きいづるしのゝめの
空に深き霧降れり

午前四時五時まだ過ぎずしのゝめの霧降れる
まのわれのたのしさ

たのしさとは云ふものゝ、一日中の寂しいのもまたこの時である。僕のいのちが、僕のたましひがまつたくわれにかへつて静かに瞳をひらいてゐるのは、多く唯その時のみなのだ。その静かな、澄んだ瞳に映つて来るあらゆるもの、といふうちにも自分自身のこと、過去のこと……それがみな胸に沁み入るやうな悔恨や寂寥を伴はぬものはないのである。過去から延いては未来の影がよりどころのない不安を引いて頭に上つて来る。さうしたなかにある獨りぼつちの自分を描きながら、殆ど毎朝これら線路の傍や、林の中や、森のかけ、若くは麥畑の畔を歩いてゐるのだ。が、それも暫しで、やがて空が光り輝いて、種々雑多な汽笛の音や人の聲などが其處等に満ちて来ると、忽ちまた萎びた機械人形の自分に返つて、惶しい、そして何もせぬ一日のくらしに入るのである。書けば永くなりさうだ。此處で切つて置かう。

君は元氣か、この夏あたり、一寸でも出て来られないか。(六、五、三一)

春の一日

「やア」

と云ひながら、彼は呆氣にとられて眼の前の襖をあけて来た友人の顔を見上げた。

「暫くでした、お變りも無く」

と友人はわざとらしく丁寧に頭を下げながら其處へ坐つた。

彼はそれには返事もせずに向ほしげ／＼とその顔や姿を見詰めながら、

「どうして解つた？」

「どうしてつて天眼通でさアね、いくら逃げてても駄目ですよ。」

とよそ／＼しくいひながら、ツイと片手を延ばして其處の窓を引きあげた。

『なアるほど！』

と初めて生氣のある生來の聲を出して、

『これア好い處だ！』

窓からは一面に墓場が見下された。照るとも曇るともない日光がしつとりとその上に流れて、中どころに植わつてゐる大きな椿には花がいつばい咲き枝垂れてゐる。

『好いとも、……、好いには好いが、だつてどうして解つた、……、自宅で喋舌つたか？』

友人は意地悪くにやく／＼笑ひながら、尙ほきよと／＼と其處らを見廻して、

『ホ、あんな大きな銀杏もある、秋だつたら素敵でせうねエ。』

彼も諦めて、一緒に窓から首をつき出して毎日見馴れてゐる荒れはてた墓地を見てゐたが、不圖氣がついて、

『一體けふは何曜日だね？』

『金曜！』

友人は素直に答へた。

『何か起つたのか、役所はどうした、細君でも病いのか？』

『イ、エ。』

と終に友人も本氣になつて、

『何でもないんですよ、此處の解つたのは、ソラ、信州の中村君から聞いたのです。』

『なアるほど！』

と云ふと、兩人とも大きな聲を出して笑つた。

彼はどうしたものか、近來ひどく人に逢ふのが辛くなつてゐた。朝晩顔を合はさねば氣のすまなかつた親しい友人や門下生などとも言葉を交ふるのが苦し

く、とう／＼斯うした部屋を借り込んで朝起きると自宅を飛び出して夜遅くまで此處に籠つてゐた。そして、誰にもこの部屋の所在をば知らせなかつたのであつた。

『信州になら知らしてやつても大丈夫と思つて手紙の表に書いたのだつたが、蟻の穴から壊れた形だネ。』

ともう一度聲を合せて笑ひながら、

『でも君、頼むから君だけにしておいて呉れたまへ、折角おとなしくなりかけてる所なんだから。』

『大丈夫です、誰にも云ひはしません。』

友人もいつか全く平常の眞面目な顔になつてゐた。

『あんまり淋しくなつたもんだから、……、實は今朝山の神と一悶著あつたものですからネ、むしやくしや腹で到頭役所も素つぽかしてしまつたのです、そ

してふいと此處のことを想ひ出して、中村君の手紙を探して、やつて來たのです。どうもお邪魔してすみません。』

『いゝや、それア却つてよかつたが……、僕も何だか淋しくて仕様が無かつたところなんだが……、もう君は細君と始めたのかい。』

『うゝん、矢つ張りこれが無いからです。』

と指を丸くしてみせた。

『だつて貧乏は百も承知の上で出て來たんぢやないか。』

『だつてあんまり醜いからなのでせう、見ると聞くとぢア大きな違ひですからねエ、先生郷里から出て來て二三月しかたゝないのに著物はぬがれる、借金の云ひわけはさせられるといふので、次第に自暴棄になつた形なんです、今日もふて寝なんかしています！ 女なんて仕様の無いもんだ！』

吐きすてる様に云つたが、また氣を變へる様に立ち上つて、今度は一方の他

の窓をあけた。

「ホウ、咲きましたねエ、櫻が！」

「今氣がついたのかい、もう君二三日前から咲いてるよ。」

「でも此處のはまた別な様だ、オヤ、木蓮もある。」

「木蓮ぢアない辛夷だよ、木瓜も見える筈だ、……、他處の誰のものでも斯うして寝ころんで見てゐられるのは悪い氣持ちぢアないよ。……どうだ、久しぶりだ一杯行かうか。」

「さうですねエ、ほんとに、久しぶりだ、奥さんにはよくお目にかゝりますが……、奥さんも氣の毒だ、あゝして留守番ばかりさせられてゐちア……」

「僕もさう思はんぢアないよ、可哀相だとは思ふんだが、……、だつて夜は毎晩歸つてやるんだからいゝぢアないか、ハ、ハ、ハ。」

「さうはいきません、……氣のせぬか此頃お宅の空氣が非常に冷たい！」

「さうかねエ、困つたもんだ、君たちに逢ふのが辛いばかりでなく、女房や子供顔を見てゐるのも苦痛なんだよ、身體の具合も少々病いやうだし、ひとつは氣候のせぬがあるかも知れん！」

「さうですかねエ、ひとつはお齡のせぬもありませう、ハ、ハ、ハ。」

「まさか！ 兎に角一杯行かうよ、久しぶりだ。一寸僕は出て来るよ。」

「いゝえ、それなら私が行つて來ます、イ、エ、その位は持つてます。」

「それぢアこれで何か鐘詰でも買つて來てくれ給へ、蟹か何か。」

さう云ひながら、はや二階を降りようとしてゐる友人に小さな財布を投げやつておいて彼は身を起した。そして、ツイ軒端に櫻の花の枝垂のさきが届いてゐる窓際の七輪に石油臭いたきつけの屑を入れ始めた。(六、四、一二)

廻り網

機しい位の静かな晝過ぎ、ふところ手をしたまゝ私は例の砂山の番屋の前に立つてゐた。對岸の安房の國の名もない小さな山々にまで光と影との裝が明らげく、潮はとろりと青んで、今が下げ汐の最中らしく、瘦せた入海の中ほどには鈍白い大きな水脈が浮いて見える。

番屋には誰もゐなかつた。大概の時には一人か二人網を繕ふか縄を繰ふかして沖を見張つてゐるのに如何したものか、縄や藁が散らばつてがらんとして居る。その番家の縁に腰を掛けて煙草を取り出しながら、冬でもない春でもない寂しい海に眺め入つて、いつしか吾を忘れてゐると、ひよつこり一人の漁師がやつて來た。

顔は知つてゐるが名も知らない男なので挨拶もせず居ると彼は其儘黙つて番屋の中に入つて切りに何やら取り出し始めた。やがて、もう一人來た。どうも二人の様子がいつもと違つて見ゆる。著物も長いものを著て居るし、同じ様に持つて來たものは大きな、色合までも同じな紺の風呂敷包みである。一人はその包みを番屋の奥から取り出して來た吠の中に押し込んで居る。其處へまた同じ様な漁師がやつて來た。忙しさうでもあるし、何となく氣が引けて心を残しながら私は番屋を立ち去つた。

宿に歸らうとして或る知り合ひの漁師の家の庭を通りかゝると、其處の六十歳あまりの爺もまた同じ様な身ごしらへを爲て、そのうしろで婆さんがせつせと例の風呂敷包みを作つて居る。包みの中には布團が入れてあつた。

『どうしたの、何處かへ行くのかね。』
『え、廻りに行くでサ。』

「廻り……？ 廻りつてどんな事をするの。」
 「なアに、大津の沖にせいごが見えたつて云ひますからネ、何だか知らねえが行つて見るでサ。」

風呂敷を結び終つた婆さんが口を出した。

「漁次第ア、年内にや歸らねえつて云ひますからネ、老人にや船底が冷えませうよ。」

何だか知らないが兎に角遠くの方に漁するものだといふ事だけは解つた。初め、爺さん夫婦は何か内輪話をしてゐたらしかつたので、それにも遠慮されてもつと詳しい事を聞きたいとは思ひながらまた私は其儘其處を立ち去らざるを得なかつた。

宿に歸ると机の上いつばいに日がさして、此處も却つて物憂い様な静けさである。程なく濱の方から出船合圖の法螺貝が聞えて來た。貝の音も今日は何と

なく澁んで聞ゆる。ぢいつとそれを聞いて居る間に私はまた番屋に行つて見る心になつた。

番屋にはもう誰も居なかつた。そしてその丘の下の砂濱に皆集つて居る。いつもはずつと上の方に引き上げられてある大きな漁船が波うち際まで引き下されて、十人ほどの漁師はその周圍に集つて種々なものを積み込んで居る。例の紺色の風呂敷包みが特に砂の上に目立つて散らばつて居り、大きな籠や釜やも並べてある。或者は薪を割つて居り、或者は水を擔いで來、或者は大根をしたたかに提げて來た。漁師の家族も多勢砂の上に群れて居る。けれども今日の天候のせむか、それがみな極めて靜かに落ちついて見えて、殆どものを云つてるらしくも見えぬ。私も砂山を降りてその群の中に入つて行つた。

「さア、そろく出かけべえや。」

總てのものが船の中に積まれたのを見終つて、この長濱番屋の頭をして居る

聞いてみると土地の若い漁師はみな其日々々の漁に忙しく、いつもは遊んでゐる様な連中だけが昨今の不景氣から遠くへ出かけたわけだ相なのだ。年内どころか、二三日するとこの船は歸つて來た。その話を聞いて急いで濱へ出てみると、もう船のあと始末もして了つて、連中はいま番屋で皆して湯氣の立つ油揚げ飯を喰つてゐた。なるほど、よく見れば爺さん半爺さんの集りであつた。(五、四、一)

忠左船頭は徐ろに命令した。船は音なく砂の上から油の様な波の上に浮び出た。私が再び番屋の丘に登つた頃は船はこの長い／＼白濱の渚に沿うて靜かに漕いでゐた。櫓を漕ぐ矢聲が寂しく續いて、次第に遠くになりつゝある。私の側には六さんといふ若い勇み肌の漁師が同じくこの船を見送つて立つてゐた。

『駄目よ。』

彼は獨り言のやうにして私に應じた。

『漁は半分調子もんですからネ、威勢で勝たにや漁れはしませんよ、あんな爺ごろばかりが乗り出したつて、ヘツヘ！』

憫れむ様に笑ひ捨て、

『この前、私どもが木更津の沖に行つてた時にや、二十歳から三十歳ごろの者ばかりで、房州千葉三崎邊の船が何十艘つて集つてる中でそりア目ざましいもんでした。』

夏の花

下婢に導かれて私の部屋に入つて来たのはまつたく思ひがけぬ人であつた。その時分、私の居た下宿屋は或る新開街のすつとはづれの榛の木の林の蔭に在つた。だん／＼と切り開かれて来たその林は僅かに其處に十四五本ばかり残されて、ツイ私の机を置いた窓に近く、柔かな、細かな葉を交して初夏のみどりにうち煙つてゐた。そしてその日はその頃（ころ）にありがちの風を交へて雨がほそぼそと降つてゐた。窓をしつかり閉ぢて、筆の垂るゝガラス越しに茫然と其葉のそよぎに見入つてゐた時に、眼覚るばかり美しいその人は入つて来たのであつた。

その人と知り合つてからかれこれ二年あまり経つてゐた。その人は若い未亡

人であつた。肺を病んでゐるといふためばかりでなく、つゆのやうに清くさびしくそしてさかしい人であつた。

私たちがをり／＼歌など詠み交すやうになると間もなく二人のあひだにわけあるらしい噂が身近に立ちそめた。私も、おそらく彼の人（ひと）もたゞ寂しい微笑でそれを聴いてゐた。

私は不意の、しかも初めての訪問をいぶかりながらそれとなくその人の様子に眼をつけてゐた。眼立つてその日はうち沈んで見えたからである。

或る事情で今までの海岸の住居を引きあげて暫く郷里の方へ歸ることになりました、とのみ少女は多くを語らなかつた。そして、何といふことなく二時間ほども居て歸つて行つた。

ともすればとぎれがちの話の斷間に私はをり／＼窓の戸をあけた、その時どとに眞青の榛の葉ごしに細かい雨が降り込んで来たのであつた。

その日の私の豫覺は的中つてその人の二度目の結婚を聞いたのはそれから間もなくであつた。

めぐりあひやがて直ちに別れけり雨降る四月す
ゑの九日
ゆく春の嵐のみだれ雨のみだれ静かにひとゝ別
るゝ日なり
ひやゝかにつひに眞白き夏花のわれらがなかに
あり終りけり

夏の鳥

山深く、若くは溪の奥深くわけ入らうといふのならば別、東京あたりの郊外にぶらりと杖をひいて聞き得る鳥のなかでは私は頬白鳥が好きである。樹木ならば榎か櫟の落葉樹、しかもそのおち葉に似た親しみをこの鳥は持つて居る。

漸く色づきかけた麦の畑中の徑をぶら／＼と歩いてゐると、不意に頭の上の櫻の梢などから

一筆啓上つかまつりそ。

と啼くといふこの鳥の寂深い聲が落ちて来る。驚いて見上げると微風にそよいで光つてゐる葉がくれに矢張り落葉色をしたこの小鳥が静かにとまつてゐるの

である。佇んで耳をすましてゐると、今度は向うの岡の何やらの木の上でも同じのが啼いてゐる。あちらがやめれば、こちらのがまた啼き初める。

遠く続いた麥のいろにも、ほか／＼する地のほめきにも、光り煙つてゐる岡の上の雲のむれにも、歩き疲れて何やら浮世なつかしくなつてゐるわれ等の時の心にも、すべてによく調和して、しみ／＼と耳が傾けらるゝ。

月並のやうだが私は杜鵑も好きである。

私は此鳥を聴いてゐるとちつと昔の太古の世界をふら／＼と思ひ浮べる事が多い。たつた獨り、此世に生れ落ちてゐる様な寂しさを感ずる事が多い。

夜はいやだ、眞晝の雲が四方の空に輝いてゐる時に聴くのが好きだ。溪間でもよい、原の中でもよい。

梟も好い。

ゆふぐれ、または東明の寝さめなどに思はずも聞きつけて、心を澄すことが

多い。

ひとつ／＼足の歩みの重き日の阜月の原にほゝじろの啼く

わが死にし後の静けきかゝる日に斯くほゝじろの啼き續くらむ

ほとゝぎす聴きつゝ立てばひと滴のつゆよりさびしわが生くが見ゆ

わがいのち空に満ちゆき傾きぬあなかなすかなり遠ほととぎす

眞晝野や風のなかなるほのかなる遠き杜鵑のこゑきこえ來る

暈帯びて日は空にあり山々に風青暗しほととぎす啼く
 朝雲ぞ煙には似るこの朝げあわたゞしくも啼く
 ほととぎす
 なきそめしひとつにつれてをちこちの山の月夜
 に梟の啼く
 たそがれのわが眼のまへになつかしく木の葉そ
 よげり梟のなく
 耳すませばまこと梟にありにけりさびしき鳥を
 きけるものかな

ダリアの花

対社会、對自己、それらのすべてに疲れ果てゝゐたといふか、何かなしに物
 かげにかくれてゐたいやうな時に私は人知れず結婚してしまつた。

そして一二の親しい友人にすら秘して或る場末の女郎屋街の素人屋の二階を
 借りて隠れ栖んだ。わざわざ其處を選んだのではなかつたが或る便宜もあつた
 し、却つてそんな所の方が身も心も解きほぐして休息するに適當してゐるかも
 知れぬと考へたからであつた。

西隣りの遊女屋の物干臺には毎日店を張る前の涼みとか、または洗物を持
 つて杯、よく遊女どもが登つて來た。それらの遊女だちに覗き込まれて何かと
 からかはれながら私だちは、沈黙した、緊張した、打疲れた様な朝夕を過して

わた。そして一日も早くそれを機として生れ代つた様な新しい生活に入らうと努めてゐた。

毎朝私は日の出る前に起きて、程近い停車場に出かけた。其處で二三種の新聞などを買ひ、まだ人の少い郊外電車に乗つて、同じく郊外の岡の上に設けられた或る大きな花園に行くのを常とした。

その花園では秋草なども作つてはゐたが殆ど全部グリアの花で埋つてゐた。華洲園と書いた木札の立つてゐる入口の軽い傾斜の坂道を登るとばらばらと並んだ稚松の間から廣い花園の一端が見えそめて、やがて露を帯びたその花が山深い湖のやうな静けさで身のめぐりに咲き亂れて居るのを見るのであつた。

淡紅、眞紅、雪のやうに白い花、または夜の蝶に似た黒い花も混つてゐた。私の乳のあたりまで生ひ伸びて咲いてゐるなかを歩くともなく歩いてゐると、

ほんたうに自分の皮膚まで清められるやうであつた。水をやつてゐる園丁などが居るばかりで、多くはその頃私ひとりきり入園者はゐなかつたので、すつかり心を開いてそれらの花や葉に對する事が出来た。そして自分の今までの穢れた血や、疲れた魂が清水に浮く油のやうにそれらの花の上に浮んでゐるのを感じることもあつた。洗へ、洗へ、そして新しい身に返れ、私はいつもその時斯う心を引き緊めて思ひ昂つてゐた。

或る朝、その園内に佇んでゐると、はらくと日の照るなかを通り雨が降つて來た。

彫られたやうに静かであつた花といふ花は、その時かすかに揺れ渡つた。私も蒼い額を日光に晒しながら、帽子をとつてその鮮かな雨の粒に濡れて立つた。

夏はいまさかりなるべしとある日の明けゆく空
 のなつかしきかな
 わが薄き呼吸も負債におもはれて朝は悲しやダ
 リアの花
 とほり雨朝のダリアの園に降り青蛙などなきい
 でにけり
 とほり雨過ぎてダリアの園に照る葉月の朝の日
 の色ぞ憂き
 夏の樹にひかりのごとく鳥ぞ啼く呼吸あるもの
 は死ねよとぞ啼く

物置の二階

昨春以来私共が部屋を借りてゐた宿の主人は永年横濱に出て運送業を営んで
 ゐた。それが今度悪質の脚氣を病んで急に歸つて來ることになつた。そのため
 私共は他へ移らねばならなくなり、知り合ひの土地の人をも頼んで諸所探し歩
 いたがなか／＼無い。元來この土地は例の呼吸器病を恐れて他所から來る人を
 排斥する方針をとつてゐるので、空いてゐる部屋があつても貸さないのである。
 一二日が／＼りで漸く借り出したのが今の宿で、半農半漁のほかに宅地の周圍に
 廣い蜜柑畑を持つて居る家である。
 先々代が植ゑて置いたといふ蜜柑はいま揃つて見事な老木となつて居る。當
 代の主人が六十歳を越して居る様な所から推しても餘程舊い木に相違ない。そ

の蜜柑畑の隅々に聳えて居る松も附近では見る事の少ない位揃つた老松である。道路から一町ほど引き込んだ藁葺の家はそれらの樹木に囲まれて屋根をすら見ること出来ぬ。

奥座敷の暗い八畳を家族の居間に宛てた。そして私自身はその廣庭の隅に建てられた物置小屋の二階に机を置いて、多く其處に籠ることにして居るのである。

物置小屋は附近に珍しい瓦葺で、建つてからまだ幾らも経つては居ぬ様である。両手をかけねば動かぬ位の重い戸をあけると、其處には雑多な農具や沖の道具が押し込んである。其隅に階子段がついてゐて、それを登れば先づ織機が在り、長持や古葛籠、養蠶の道具など置いてあつて、その奥に赤染んだ畳が敷かれてゐる。

八畳あるのだが、こちらにも箆笥その他平常不用の家具が並べてあるので極

く狭く見ゆる。それに私の様な脊の低い者でも少し頭をかどめて歩かねば直ぐ棟木につかへる。二階々々とは云つて居るが、天井と云つた方が適當かも知れない。

小さな窓が南と東に在つて、あとから急造へに附けたらしい障子が箆めてある。私は左手から光線の来るのを喜ぶ癖があるので、東の窓邊に直角になる様に机をくつ著けて、南の窓に向つて坐ることにして居る。正面の方は少し大きい、机の側の窓は三尺四方位ぬしかない。

その小窓を開けると、直ぐ壁際から鬱蒼たる蜜柑の林となつて居る。林はづれに一の松が並び聳え、その梢の間から断えず浪が響いて來るのである。

何もよう爲ないのだが、机の側に来てさへ居れば幾らか心が安まるので、朝も妻子より一二時間も早く起き、此處に来て坐つて居る。

屋根が低く、窓が小さく、それに附近の木立が餘りに茂いので、自然と風を遮つて、晴れた日は非常に暑い。多くは半裸體で、左の肩や脊を窓に凭せながら讀んだり書いたりする事にして居る。

花時は嘸ぞかしと思はれるのだが、今も尚ほ蜜柑の木立には種々の蜂が無數に群れて居る。浪が風いで風の無い晝間など、その羽音だか唸り聲だかど氣味の悪い様に、また何だか總て世の中の事が物憂くなる様に、窓に満ちて聞えて居る。

赤い肌には黒い縞のある蜂が窓から多く出入するのに或時氣がついた。机の上に来てとまる事もある。更に氣をつけて見ると、ツイ自分の頭のうしろの窓の戸袋の間に巢をくつて居るらしいのだ。私は元來餘り蜂をば嫌ひでないのだが斯う身近に群れて來られると流石に氣味が悪いので、可哀相だと思ひながら四五疋立て續けに打ち殺した。けれどもなかく數が減りさうにない。そして、

一つく何か唇にくはへて運んで來るのを見てゐるとまた不憫にもなつて、其儘に捨て置いてあるのだが、不意に腋や髪の上に来てとまられたりして膽を冷す事が屢々だ。いつそのこと殺し盡さうか、此儘に巢立たしてやらうか、と毎日その事で氣を揉んで居る。

斯う書きながら不圖眼をやると雨戸の棧を一疋這つて居るところだ。何か、綠色のものを銜へてゐる。何かの花の藥らしい。

物置の二階に鼠や蜂と同居しながらも、唯だひとつ私の嬉しかつた事は、母屋と離れた一軒立ちの、而かも斯うした天井であるために、全く他と隔離してゐる事であつた。

そしてその喜びも忽ちに破れてしまつた。

或日、例の如く机に向つて、好い氣持になつて居ると、極めて細い、軟かな

聲で、
『父うちやん！』
と呼ばれた。

驚いてそちらを見ると、織機の蔭の階子段に眞圓な、小さな（とも云へない位に肥つて居る）顔がくづれ相に笑つて此方を眺めて居た。

物置相當の階子段で、とても今年四歳やそこらの子供の登れさうもないものなので、すつかり安心してゐたのであつたが、終にその時からその幸福も諦めてしまはねばならなくなつた。階下の入口の戸を締めて置けばいゝのだが、家人の都合で大抵其處はあけ放たれて居る。

この子は初めから親爺子であつた。まだ乳の飲み度い盛りに母親の病氣のために母親から押し離たれて以來、すつかり父にのみ懐いてしまつた。便所に行くにも、御飯を盛るのにも父親の手でなくては承知しなくなつた。斯うなると

何だか憎らしいなど云つて居るうちにまた母親には赤ん坊が生れたのである。

で、今でも餘程よく機嫌をとつても母親とは遊ばないで、間がな隙がな父のあとを狙つて居る。こちらに移つてから、日に幾度か物置の階子段の下でこの子の泣聲が起つて居たのであるが、とう／＼彼はその階子段を這ひ登つて來たのだ。

今度の宿に矢張りこの子と同じ歳になる男の子が居る。いゝ遊び相手なのだ、大きさも強さも氣性も、この子の方が遙かに優れて居るため、始終宿の子は泣かせられ続けである。それをこの子の母親なり、父親なりが宿に氣兼ねして、わけもなくこの子を叱るので、子供心にも不平が募ると見えて、今では却つて宿の子を見さへすれば泣かせ始めて、宿の人たちからも憎まれるやうになつた。

母親に叱られ棄て、泣いて居るか、又は泣きながら手を引かれて奥座敷の方へ歩いて居るのなどを見る場合が殆ど毎日だ。

『子供のために！』

險崖からすべり落ちながらのやうに、斯う思ひ著いた絶望に似た苦痛のために、この物置の二階は或は私にとつて容易に忘られない記憶となつて残るかも知れない。(五年六月二十日)

座敷には母親と赤ん坊が多くは寝たまゝで居るし、新しい玩具は無し、庭に出て宿の子たちと遊ぼうとすればその幼い兄弟共は一致してそれを近づけぬ様にする。青い葡萄を摘んでは叱られ、鶏の雛を籠から出しては叱られ、いよいよ居る所が無くなつて非常な努力で階子段を這ひ上つて来たのであらう。くづれさうな、それでも何處か悪いことをした様な、他を憚つた笑顔を見てゐると私も一途には叱れなかつた。

それでも三度に一度は追ひ降さねばならぬ。泣きながら追ひ降されて行つたかと思ふと、もう庭で廻らぬ舌の軍歌が聞える。

それが暫くやんだかと思ふと今度はまた火の附く様な泣聲が起る。宿の人ややがてはその母親の聲も混つて来る。何かまたやつたのに相違ない。机のまゝ少し延び上げれば南の窓を越えて庭の一部が見ゆる。

屋根の草

282

「ねエWーさん、八ヶ岳は上諏訪からの方が近いぢアありませんか」

云ひかけて同じ下宿のDー君が私の部屋に入つて来た。手には何やら薄い書籍を持ちながら、「さうすると何でせう、信越線を廻るより中央線で諏訪へ行つた方がいゝでせう」

書籍は地図であつた。それを手早く開いて私の前に置きながら、顔をまぢかく寄せてそれらしい所を指さきでさして居る。

「無論さうです、でも松原湖は諏訪とは反対の側にあるのですから矢張り信越線の方から行く方がいゝでせう、それに昨年あたり小諸から其處の近くまで輕便鐵道も出来た筈です」

283

Dー君が八ヶ岳のことを云ひ出したのは、つきり私が二三日前、金さへ出来たら八ヶ岳の麓にある松原湖へ出かけ度いものだと言つたのに關聯してゐると考へたので私は直ぐ斯う答へた。

『なるほど……』

と答へたきり、一心に地圖に見入つてゐたが、「ねエWーさん、信州の往きか歸りに御嶽か妙義山に登つて見たいと思つてゐるのですが、……、御嶽はいゝ所ですか」

『さうですネ、兎に角變つた所です、青梅から二里ほど歩いてそれから山に懸るのですが二三十町登つた山の上に神官ばかりで出来た三四十戸の部落があつて、その神官の子供たちばかりのために小學校なんか出来てましたよ、何しろ非常に霧の深い所です』

「でも夏だとそんなでもないでせう」

『秋ほどにはないでせう……それに遠望もあまり利かず、まア寂しい静かな山です、月の夜なんかによく佛法僧とかいふ鳥を聞きましたつけ』

『宿屋は？』

『神官の宅で泊めてくれます、まるで普通の宿屋と同じです』

彼はまた黙つて暫く考へてゐた。

『妙義山は？』

『妙義はたしか松井田で汽車を降りるのです、それから一里半もありましたか……、これは關東平原の縁から切り立つたやうに聳えた岩山です。山の半腹に神社があつて、社の周囲に急な傾斜で二三十軒の町らしい所が出来てゐて、宿屋なんか中々大きいのがあつたと覺えてゐます。そこから關八州が見晴らされるわけださうですよ』

『どつちにしようかなア』

彼はまた地圖を爪繰り始めた。

『それア信州へ行くのなら妙義ですよ、御嶽は別に出直して行つた方がいゝでせう。第一中央線で行くより信越線の方が遙かに面白い、碓氷もいゝし、碓氷を出て井澤から淺間の裾を見渡した時なんかほんとにぞつとします。』

『だつて、中央線も素晴らしい景色だつてぢアありませんか。』

『景色はですが、夏は隧道がたまらない、何しろ小佛笹子なんてのから始つて諏訪までには三四十もあるでせう。碓氷の方にも二十五六たて續けに續きますけれどこちらだと其處だけ電氣で運轉するので、窓があけて置けますから却つて涼しい位なのですが、中央線の方は煤煙で窓があげられません。景色と云つても先づ雨の日ならば雲と山との具合がなか／＼面白いが、かん／＼照りつける時に見る景色ぢアありませんよ。たて込んだ山の中を走るのでから殆ど遠景がきゝませんもの。』

「だつて、富士見なんて所は素敵だつてぢやありませんか。」

「オ、さうだ、あのあたりはいー」

私の心には久しく見ないでゐる山深い景色がひいやりとして浮んで来た。

東京から行く甲府の盆地を過ぎて釜無川を渡る。そして葦崎の停車場に著く、其停車場附近で初めてこの線路での落葉松を見ることが出来るのである。

私はこの木を見て漸く山國へ入り込んだ安心を感じるのが常であつた。その停車場の石炭屑のこぼれてゐる傍の落葉松林から、遠い中空に聳えて居る駒ヶ岳、鳳凰岳、乃至八ヶ岳から蓼科山の頂きや裾野や、または汽車の窓から眺め下さるゝ木深い溪谷、その溪間に白々と激んで居る密雲、さうした光景がまさくと眼の前に描き出されて来た。

「葦崎から富士見、富士見から上諏訪、そのあたりはまったく素敵です、ことに夕かけて其處等を通るやうにすれば一層ようござんす！」

私が意氣込んで斯う云ひ出したのを見て兼てから中央線を通るつもりでゐた

D—君は漸く安心したやうにいつもの明るい笑顔になつた。

「それぢや、矢張り中央線から行くことにしませう、金が残つたら歸りに信越線を廻ります。」

青山學院の生徒であるこの青年は二三日うちに東京を立つて先づ上諏訪に友人を訪ね、それから日本アルプス連山中にある白骨温泉に行くことになつてゐるのである。其處で讀むために彼は原書と譯とを併せていろいろの書籍を買ひ込んで来た。メエテルリンクの「青い鳥」、スエデンボルグの「神智と神愛」、天界と地獄」メレチコフスキイの「人及び藝術家としてのトルストイ、並びにドストイエフスキイ」、夏目漱石の「心」、窪田空穂の「日本アルプスへ」など、まだ他に學校の参考書などもあつた。そして一冊を求める毎に抱き締める様にして一々私に持て来て見せてゐたのである。

私もいつか今日明日に迫つてゐる仕事をも忘れて、氷など取り寄せながら眼の前の地圖を種に、それからそれへと微の生えた旅行談に耽つた。一しきりそれが済んで部屋が静かになると、窓の側に書きかけの原稿紙が幾度びか風に吹かれて飛び散らうとして音を立てゝゐるのに気がついた。

彼は見るともなく其机の上に眼を移しながら、『あなたの松原湖はいつになりませう、早くお仕事が済みますとネ、御一緒ですけど。』

『でも中央線では駄目ですよ、行けば私は信越線で行きますから、ハ、ハ、ハ、』
『ハ、ハ、ハ、困つたな！』

よしこの仕事に満足に出来上つたところで、それから得る報酬では眼前に迫つて居る苦しい債務の半ばだも済ますことは出来はせぬ、『松原湖どころか！』と私の心は初めから苦笑してゐたのである。

『この部屋はなかく風が入りますネ。』

ぼんやりと原稿紙から目を離さずゐた彼は暫くしてから斯ういつた。

『エ、風はようござんすが、どうも煤煙がひどくて、……御らんなさい、直ぐこれだ。』

出して見せると私の掌から腕にかけて薄黒く油じみて光つてゐる。

『これは酷い！』

と云ひながら、ツイ一尺ほど距てた向うが隣家の壁となつてゐる薄暗い窓から空を首を傾げて仰ぎ込んだ。

『この小さな窓に、ほんとは何處から入つて来るのですか、ペンを持ちながらちよつとでも何か考へてますと、もう紙にも机にもベツとりと來てますからネ實際氣味が悪い。』

彼は煤煙のことはもう何とも云はなかつた、そしてやゝ暫く其儘窓から覗いてゐたが、

『どうもよく晴れましたねエ、何だか秋の空のやうだ。』

『風のせいでせう。』

私も何気なくさう云ひながら身をそらして屋根と屋根との間の狭い空を振り仰いだ。そしてその空の眞實高々と定つてゐるのに驚いた。向うの屋根の頂きには何やら四五本の青草が生ひ立つて風に吹かれて細々とそよいでゐる。

『いゝ雲ですネこまぐに散らばつて……ほんとうにもう此分では秋ですよ』

『さア愚圖々々しちア居られない、明日にでも出かけるかな！』

地圖を取り上げると手拍子を取りながら彼は部屋を出て行つた。誘はれたやうに私も立ち上つたが、サテ、何處に行かう氣も出なかつた。

(五年七月二十二日本郷湯島にて)

立秋雑記

耳を傾けてゐればゐるほど、だん／＼蟲の聲が滋くなる。湯島天神町といへばさう場末でもない東京の街中に、斯うまで蟲が鳴いて居やうとはまつたく意外であつた。其處でも此處でも四邊いつばいに鳴いてゐる。さすがに松蟲鈴蟲などはゐない。みな蟋蟀だ。

硝子窓を開け放つて、すぐその下に枕を寄せて寝てゐると、屹度夜半の二時か三時に眼の覚めるのがこの一月餘りの間の癖となつて居る。そして眼の覺めたまゝ東明を待つのだが、時には起き上つて机に向ふこともあり、電燈を點けるのがいやさに暗い窓につめたく腰を掛けて煙草を吸ふこともあり、時には枕のまゝ窓から流れ入る風に汗ばんだ額を吹かせてぢつとしてゐることもある。

この二階の窓の近所で唯だ一本の樹木である青梧桐が丁度私の部屋の前に立つてゐて、その實や葉がさら／＼と音を立てゝゐる夜などは踏み割いだ蒲團を惶て、被り直さねばならぬやうな冷さを感じることもある。いつの間に降り出したか知らぬ雨に枕許をびつしより濡らして居ることもあつた。

今夜は今しがた月の沈んだ後らしく、眞闇でもない深げな空に青い星が離れ離れに三つ四つと煌いて居る。闇のなかに浮き出た青梧桐に微に風が見えて、あの黒色の小蟲の聲がまつたく降るやうだ。

斯うしてゐて東が白んで来ると階下を下りて、音を立てないやうに顔を洗つて、まだ女中すら起きない前に私は毎朝散歩に出る。屋並も、街路もまだしつとりとしてゐて、静かだ。此頃になつて殆んど毎朝一時間ばかり霧が降つて来る。

湯島天神の境内を通り抜けて裏の石段から不忍の池へ出る。蓮はもう散つて

しまつた。それでもいかにも疲れたやうな、静かな顔をした散歩者は青い葉ばかりの池の畔をまだ澤山歩いてゐる。私は元來この蓮の花を好まなかつたが、今年の夏を偶然この池の近くに過したゝめに何となく親しみを感じるやうになつた。蓮の花そのものよりもそれを見てこの腐つたやうな池のめぐりを歩いてゐる此等の朝の人々を親しく思ひ始めたのかも知れない。鴨やかいつむりの水鳥が散り残りの花の蔭を泳いでゐるのを見ることがある。一時は鷺が毎朝空から群れてまひ下りて来たが、此頃ではすっかり居なくなつた。蜻蛉釣の子供もいつの間にか影を消した。

池から上野の山へ登ると、櫻の葉がもうすっかり黄ばんで、路傍に散つてゐるのも非常に多い。私は毎年木槿の花が咲くと、あゝ秋が来たと思ふのが常だが、この櫻の葉の染るのを見ると、いよく深くそれを感じるのだ。柿も、漆も、榎もいゝが、この木の黄葉が最も人なつつかい。

ほろ／＼と櫻黄葉の散るころぞわがたましひよ夙く歸り來よ
 十年も前に江戸川べりを歩きながら詠んだ歌だが、今でも毎秋この悲哀を繰
 り返す。

大佛下から折れて動物園圖書館の邊へ廻るとこの落葉はますます深くなるや
 うだ。深い霧のなかに子供が石を投げ上げてゐるのを見るとそれは銀杏の樹だ、
 もうこの樹の實も熟れ始めたのだらう。葉はまだゆつたりと青い。

私は停車場の朝が好きだ。晝も夜もいゝが、朝の停車場ほど柔かな、静かな、
 親しみを持ったものは無い。人といふ人がみな各自鮮かな輪郭を同じ色に染か
 へて押し合つてゐる様な心地がする。自分もその中に入つて、そしてそれらを
 ぢいつと眺めてゐるのが誠に可憐しい。

朝の六時ころに上野に著く汽車があるが、それはこの數日間毎回殆ど百人
 位づゝの學生らしい男女を送つて來る。見てゐると改札口を出た彼等はやがて

俥に乗つて、身體よりも遙に大きいやうな荷物を前に抱へながらそれ／＼の方
 向に走つてゆく。何となく悲しいやうな微笑を覺えながら目送せざるを得ない。

漸く人通りの繁くなつた廣小路を歩いて四辻の角まで來ると、其處に立つて
 ゐる一人の新聞賣りの子供は黙つてその籠から二種の新聞を取り出して私に渡
 す。二ヶ月間毎朝同じ事を繰返すので彼もいつか私と私の買ふ新聞とを覺えて
 しまつたのだ。それを棒のやうに細く巻いて洋杖代りに振りながら下宿屋に歸
 つて來ると、漸くお茶の湯が沸いて居る。

私は凡そ二月目ごとに種々の用事を帯びて轉住先の海岸から東京へ出て來る
 のだ。今度出て來たのは去る七月の八日で、一週間ほど滞在の豫定であつた。
 知り合ひの下宿屋へ來て見ると、學生街の夏のこと其頃は二階も階下も殆ど
 がら空きであつた。二十室からある二階のその室この室と見て歩いて、青梧桐
 のさし懸つてゐる窓のこの室を選んで机を借りて据ゑてみると、非常に居心地

が好い。午前と午後、または風の具合などで涼しさの變るごとに机と座布團とを携へてその室この室と移つて歩くのさへ何となく楽しみとなつた。遠い旅さきの惶しさもなく、家族に圍まれてゐる懶さも無く、深い林の蔭にでも隠れてゐるやうな静けさが常に私の身邊を包んでゐた。で、私は直接の用事のある二三の人を訪ねたほかは極く親しい友人にも上京したことを知らせず、僅に朝夕の散歩に出るだけで、常に四疊半の室にたつた獨りで籠つてゐた。そのうちに一週間は経ち、一月は経ち、終に二月も過ぎてしまつた。さすがに今は此室にも飽き、家族戀しさを感ずるも來たが、今度はまた新しい用事を濟さないことには歸るにも歸られなくなつてしまつた。學校の暑中休暇も終つたので今まではあれほど静かであつたこの二階が忽然として喧燥の巢となつた。ヴァイオリンが響き、尺八が鳴り、浪花節が唸られる。階子段は不斷に跳ね返るやうな音を立て、來た。斯うなると私はまた室にちつとしてゐられなくなつたが、暑い日

中にさうく出ても歩かれず、いよく夜半の寢覺と朝の散歩とが身にしむやうになつた。

留守居の妻からの手紙で見ると、あの砂ほこりのした濱街道に木槿の花が咲き續き、それからその砂丘の松林には曼珠沙華が燃え立つてゐるさうだ。して見ると、あの松輪崎の端には毎日西風が吹き寄せて、外洋のうねりが白々と中空に碎け立つてゐるに相違ない。あゝ、さう思ふと流石に住み馴らしたあの砂丘の村も悪くない！

それにしても速く錢を拵へてその村へ歸つて行き度い。

東がだんく白んで來た。風は次第に烈しく、ガラス戸が暫くも鳴りやまぬ。この分では今朝は霧は降りて來ないだらう。何となく青梧桐がいたましい色をしてゐる。

私と酒

私の生れたのはすつと暖い國なので、蝮、ひぐらしなどいふ毒蛇類が甚だ少くない、さうして以前斯ういふ云ひ習はしが行はれてゐた、蝮に噛まれて死ぬ數と焼酎飲んで死ぬ數と年々相等しいと。で、土地には女ですらアノ泡盛焼酎の一升を平げ盡してけりりとしてゐる連中が多かつた。私の祖母などその中の豪の者であつたのだ相だ。その血を享けてか、父も極めてよく酒を愛した。私の村には尋常小學きり無かつたので、高等小學と中學とをば十里ほど離れた城下町で修めねばならなかつた。そしてその小中學の時代、暑中休暇で家に歸ると、私はいつも獨りで二階に寝て朝寢をした。すると父はよくその階子段から幾度も一／＼首を出しては私の様子を覗ひ、終には聲をかけて呼び覺ました。

『繁！ 起けんか、今朝は好いぶえんが来たど！』
ぶえんとは刺身となるべき生魚の俗稱である。海岸から五六里山の間に入り込んだ私の村までそのぶえんを運ぶには、夏季は必ず涼しい夜間を選んでひた走りに走つて來なくては腐敗する恐れがあつた、で、ぶえんの事をはしりとも云つた、そのはしりの著くのは定つて早朝であつた。少々眠くとも父のこの聲を聞くとどうしても起きないわけに行かなかつた。階下に行つてみると他の家族はすつかり朝飯を済して唯だ父だけが私を待つて遅れてゐるのである。私が顔を洗つてゐると父は早速そのぶえんを料理して、やがて深い井戸から一升徳利を引き上げる、父は夏季は一切酒を冷して飲んだ。そして脊戸に續いて直ぐ山となつてゐる小座敷に他の家族を避けながら其處の障子を悉く取り拂つて兩人はゆつくりと相對する。何しろ私はまだ十幾歳かの少年、ことに父は極めて寡言の人であつたので双方とも終始殆ど無言で、而かも一時間若くは二時間の

楽しい朝食(或は朝酒か)が続くのであった。
 温厚な父が酒のためには随分失敗を重ねてゐた。私は幼い時からそれを見てゐるので、初めは子供心にも酒を憎み、父をも浅間しいものに思ひ騙つてゐた。そしてそのために苦勞の断えぬ母親や姉などに深い同情を持つてゐたものであつたが、矢張り享け繼いだ血筋のせゐか、それともまた次第に老い降りながら酒のためには常に妻や娘などから手酷しくいぢめ抜かれてゐる老人にツイ同情したせゐか、いつの間にか自分も父と同じくこの怪しい液體を愛する者となつてゐた。

父は三年前の十一月、終にその愛するものゝために命を終つた。中風で半身不随になつてゐる報知を受け、永年歸省する事すらしなかつた不孝の私も惶しく東京を立つて歸りにくい郷里に歸つて行つた。其頃久しく醫者の命令で斷つてゐた酒を私が歸つてから彼はまた少しづつ用ひ始めた。私共も少なからず

氣を揉んでそれを止めたが、なか／＼聞かない。それでも好きなものゝためにか、却つて其頃から病氣は薄らいで、三四ヶ月もすると全く恢復してしまつた。恰も時季が夏であつたので、久しく忘れてゐたぶえんの朝酒はまた我等の間に繰返さるゝやうになつた。十幾歳であつた私は既に三十歳になり、向ひ合つてゐる父の老衰はなか／＼またその程度でない。秋近い朝涼の山の空に眞白な雲の浮んでゐるのを眺めながら私はともすると以前のことを思ひ出して寂しい氣持になりがちでゐた。父はそんな事に氣もつかぬらしく、そして盃もほんの僅かの數しか重ね得なかつたが、楽しさうな様は前と少しも違はなかつた。或夜、彼は村の飲友達の家の嫁取りに招かれて行つた、そして餘程強ひられたものと見え、近頃になく酔つて村の若者に脊負はれて來た。私はその夜も獨りで二階に寝てゐたが、父は暫く私の名を呼んでゐた。私はわざと返事をしなかつた。今度は眠つてゐる十二歳にかなる姪を引き起して騒いでゐた。翌朝二階から降

りて行くと父は掻巻を着て臺所に寝てゐる。如何したのだと訊くと、昨夜の踊り勞れよと笑つて傍にゐた家族の者も別に氣には留めてゐなかつた。私も何か戯談など云ひかけて、朝飯をすますとすぐ山の方へ散歩に出た。十分間も歩いたかと思ふと、涙聲で私の名を呼ぶ姪の聲を聞いた。馳せ歸つてみると、一切もう駄目で、口移しに吹き込む水をすら飲むことなく、終に永しへに彼は眠り去つた。六十八歳であつた。獨りで杯を啣む時など、私はをり／＼このさびしい寡言の飲仲間を思ひ出すのである。その飲み癖など實にあり／＼と似通つてゐることをも思ひ起す。

一杯の酒を飲むに随分心を使ふ事がある。如何すれば此場合最もよく飲めるかと云ふのである。何だか身體がよごれてでもゐる様に感ぜらるゝ時は何はおき先づ湯屋に赴く、そして微かな街路のほこりをすら氣に病んで足つまだて

て家に歸つて来る。少しおなかと大きいと思ふ時には、大抵散歩をする、それもあまり歩き過ぎたり、行く先の如何で、折角の飲み度を幾分なりとも減減させる事のないやうに注意せねばならぬ。今日は豆腐か、肉か、肴か。または一切眼や手を使ふ煩はしさに耐へかねて何にもなしで、瞑目細心、唯ちび／＼と飲み入る事もある。そんな時は定つて強烈な酒を欲する。

停車場の樓上とか、公園の中とかの様なところを強ひて求めて行く時もある。市街を離れた野原の草のなかや樹の蔭を遙に慕つて行く時もある。見知らぬ人が群れ合つた燈の影の暗い様な所へ、まるで深い山にでも入つて行く心持を懷いて這入り込む事もある。そして、此等は多く必ずたつた獨りで飲み度い時に限る様である。

友人の顔など見て、むら／＼と飲みたさの湧き起る時も多い。心も合ひ、飲みぶりも合つてゐる人に對した時、特にこの慾は著しい。やア、と顔を見合は

するなり一種の哀情を引いてこの慾は湧き上る。唯だ憾むべきは、顔見ればいやでも飲み合はねばならぬといふ風にわれひと共にいつの間にか癖づいて來てゐる事である。飲み度さの心の相搏つ時はあり／＼双方の面にその色が表はれてなかく／＼隠すべくもないものである。また、偶々相會うて興容易に昂らず、何となくうら寒く感ずる時など、これを呼んで互に心を温めようとする場合もある。これは寧ろあはれ深いもので右のいや／＼ながらも例にはならぬ。宴會などゝいふのは、酒は多く手段のみに用ゐらるゝやうである。

酒の時間は多く夜に限られてゐるやうであり、私などもまた同感ではあるが、強ちさうとのみは云はれない。露を帯びた地がしいんと静まつてゐる上にほがらかな朝日が流れて、眼にも見えぬ微風が空を渡つてゐる、そんな朝など。またはかん／＼と照り入つた日光が金屬のやうな青葉の上に注いでゐる眞晝。家

の奥に籠つてゐても何となく戸外の日光に血を晒はれてゐるやうな好天氣の日。煙のやうに心の疲れてゐる時。雪のあけぼの雨の夕暮、または昨夜のつかれのお迎ひの月並もまた棄て難く、汽車汽船の窓に落ちて來る春霞秋暉、私は全く時間に關係なくこれを欲してゐるやうである。要するに自分の心の澄んでゐる時、かわく時、懂がるゝ時、一途になつた時、時をわかたずしみ／＼と飲み度くなつて來るのであらう。

酒の種類も亦たその場合次第である。一帯に私は日本酒を好んではゐるが、火の様に強い洋酒でなくてはならぬ時もある。新鮮な生麥酒に雀躍する事もあつた。顔も埋まるやうな大容器に息をつかぬ事もあり、檜の實のやうなりキウルグラス一杯に緊張した五分間十分間を費す事もある。仔犬のやうにはしやぎ入る時もあるれば、半死の熊の様な時もあり、または深山の苔の下の小石のやうな場合もある。どさ／＼と雪の降る夜半、冷いチンの幾滴に白い林檎を噛まむと

思ふ折もあり、ほくらくくに香りかけるふ秋の山に枯枝折り焚かむ願ひもあり、
繩暖簾の白馬に指さきを焼く例もある。荒川土堤の青草に眠り倒れて春の夜寒
に驚いた覚えもあり、お城の濠にとび込んで親切な角燈氏をヅプ濡れにした記
憶もある。

『随分あなたは召上るさうですなあ。』

と好奇心な眼を輝かせながら、

『一體どの位に行きます、一升ですか、二升ですか。』

といふ種類の質問に出會ふ事、殆ど際限がない。中にはありくと挑戦的險
悪相を表して、なアに俺だつて、といふ輩もある。いかにも私は酒を嗜む。こ
れ無しには實際のところ一日もよう居らぬ。けれども右の如き質問に際會して
は眞實答ふるに由なき苦笑を感じざるを得ぬのである。

二三滴を嘗めて酔ふ事もあり、一升二升、三日四日と續けても尙ほその味ひ
を失さぬ場合もある。彼等のいはゆる酒に強いといふ事は私には初めから問題
でないのである。徒らに大杯を傾け、酒宴の席に長坐し得るといふことは或は
彼等の胃の腑の強固、または瘦我慢の證左にはなるかも知れないが、決してそ
れは酒そのものゝ與り知る事ではないのである。酒を愛するあまり自然にその
量の進むといふのならば聞える、瘦我慢や好奇心や仕方無さから無闇に濫飲し
て以て一種の誇りと心得てゐる如きに至つては、全く酒の賊である。

食料ともならず薬にもならぬこの不思議な飲料が最初如何して作られたかと
折り／＼不審がられる事がある。私の生れた土地は初めにも云つた如き山國で
種々山に關する物語が多いが、其中に猿酒云々の事がある。昔獵師の一種族に
峰渡りと呼ぶ一團があり、彼等は殆ど自分の住む家とても持たぬが多く、晝も

夜も峰から峰溪から溪と涉り渡つて數日間も人里に出る事がない。流石に彼等も寂しい事をば知つてゐる、その寂しさに襲はれつゝ一縷の望みをかけてあさり求めたものはその猿酒であつたといふ。斧を知らぬ深山の奥の老木の洞に數多の猿共が集つて其處此處の梢から拾ひ集めた種々の果實を噛み碎いて貯へて置く、それに自然と雨露が溜り、いつの間にもやたら獨りでに醗酵して芳醇の香を放つ立派な猿酒となるのださうだ。この猿酒の話は子供の頃から私の興味を惹いてゐたが、いま酒に關する古事を調べた或人の記事によると、

須佐之男尊が高天原に於て天照大神と宇氣比して勝ち勝佐備て種々の狼藉をせられし時大神は之を咎め給はず、屎麻理散せる如く見ゆるは酔ひて吐き散せるならん、

と仰せられしにより既に其頃よりこの飲物の我等が祖先の間に行はれてゐたりしならむと云ひ、然らずば尊が高天原より追放せられて後に出雲國肥河上に

到り足名椎手名椎のために大蛇を斬り給ひし時突然鹽折の酒を造る事をば知り給はざりしならむと斷じてゐる。尙ほ、日本書紀に、

天孫瓊々杵尊の御子達生れまし、時に神吾田鹿葦津姫と定田を以て號けて狹名田と言ひ其稻を以て天甜酒を醸して新嘗したる、

由が見えて居るとて以て「當時醸造の法あり人々の間に酒といふものが知られて居たのは明かである」と云つて居る。而して酒を醸すには初め人みづから米を噛んで造つたと云ふ旨の記載せられてあるのを見て、私は端なく猿酒の話を思ひ合せて微笑んだ。酒、サケの言葉は、榮えであつて、「飲めば笑え樂しむ義也(倭訓栞)」とある。蓋し酒、笑、開は同語根(サク)にて榮え(サカエ)のカエがケとなる(同意義だといふのである)。(仙覺萬葉集(?)にはさけはさくるなり、風寒邪氣を避くるより來るとあるが、少々あやしい)更に酒をまたキ、ミキ(御酒、神酒)とも云ふが、ミキのミは美稱敬稱で、神又は長上に奉るために斯う

云つた事は、黒酒、白酒をクロキシロキと訓むのでも解る。神に何か言を申し上げる時に我等の祖元は我等が今日友人同士に行ふ如く酒を用いたものであらう。また、このキは元來クシの約まつたもので、ケと相通じ、ケは即ち御食のケであり、古くは凡て飲食物を指して稱へた名であるといふから、酒をば今日の米や水の如く無くてはならぬものと見てゐたものであらう。それかあらぬか日本の古典には誠に酒に關する記載が多い。更に、大學寮式に、

凡博士講説者依日數給食料。日米二升。酒一升。鹽一合。後略

と見えて居る。即ち給料は現品給與であるが其中に酒まで含まれてをるのは寧ろ豫想外と云はねばならぬ。

尙ほ、直相式に、

瓮四口、(盛參議已上白貴酒黒貴酒並暖酒料)炭一斛、(五位以上暖酒料

受直買用)

とあるをも引いて、酒を煖める材料。またはその錢までも給せられた事を述べて居る。

我等の祖先が如何ばかり酒を愛し尊んで居たかは此等を見てもよく解る。支那で上古酒を造つた者があつたところ、時の王禹はこの飲料必ず後世を誤らむとしてその造り主を殺してしまつた。儒教でも佛教でもまた基督教でも飲酒をば固く忌んで居るのは人の知る通りである。かの大伴旅人卿の

酒の名を聖と仰せしにしへの大き聖の言のよろしさ

の歌は、魏書に太祖禁酒、而人竊飲、故難言酒、以白酒爲賢者、以清酒爲聖人から來たのだと云ふし、尙ほこの歌を評して眞淵は、「或人儒人の言を擧げて此歌をそしれるは、いまだ天下の心を得ざるなり、皇朝の人古より酒と色につき世を亂せし事なし、かゝる小事と人情をいましむれば人の心に表裏の出で來めり、皇朝のこと他國の文もていふ事なかれ」と氣を吐いてゐる。全くである。

サテ、梯子酒のそれからそれと、思はずも長くなつた。考へてみれば私も随分今までに酒を飲んで来た。恐らくは尙ほこれからも飲むであらう。その従来飲んで来たのに二つの場合があつた、一つは自ら進んで飲みたくて飲んだ時と、一は他から強ひられて飲んだ時とである。この後者は今後出来るだけ避けたいものと思ふ。身體にも悪く、第一酒に對して相濟まぬ義である。飲みたくて飲む時、これは前にも云つたが私は殆ど悉く心の、魂の要求から飲んだ場合が多かつた。咽喉が渴いたからと云つて呻りつけるのは極く稀に麥酒位のものであつた。心が渴く、魂が孤獨を叫ぶ、かうした場合が後來私になくなるとすれば或は私は酒をよすかも知れぬ。乃至、心自身たましひ自身燃えに燃えて他に何等の欲求を要せずなつた場合、或は私は酒をよすかも知れぬ。(大正五年初秋)

校正を終りて

多くは旅さきでその場／＼に書いたものである。異つた雑誌に書き送つたため、同じ材料を二度書いたものなども混つてゐる。旅さきの惶しい氣持は正直にその時の筆に現れてゐていま讀み返しながら面の汗ばむのを覺えがちである。

書いた順序は中篇が最も舊く、次ぎは下篇中の「私と酒」及び「物置の二階」「廻り網」等相模の三浦半島に移つてゐた時書いたものである。一昨年の頃であつた。「立秋雜記」「屋根の草」もその頃自分だけ上京して下宿してゐた時のものである。最近のは「浴泉記」で、今年二月の作。何の氣なしに通信文の様に書き棄てゝしまつてゐたが、斯うして纏めて印刷してみると矢張りそれ／＼の創作と見ねばならぬ、今後はそのつもりで書いて見度いものと思ふ。

大正七年七月十七日

牧 水 生

大正七年七月廿一日印刷
大正七年七月廿一日發行

(定價金八拾五錢)

◀りよ海りよ山▶

著作者

若山 牧水

發行者

東京市牛込區矢來町三番地中の丸
佐藤 義亮

發行所

東京市牛込區矢來町三番地
新 潮 社
電話番町(八八九〇九番番)

番二四七一(京東)替換

印刷所

東京市神田區宮本町五
電話下谷四〇六七番

新潮社印刷部

印刷者 高橋治一

■ 集文散の人詩兩 ■

金子薫園氏著 — 第三編 —

■ 自然と愛

附録 ▼特製美本
別後愛情 ▼價五十五錢
(二百首) ▼送料六錢

▼報知新聞曰く、散文集にして「季節の移り變り」に於ては四時の風物を叙して精細を極め、「月夜の網」其他の小品文に在りては詩味溢るゝが如き氣致、優し相推移するさまを叙し、觀察の微行文の妙、流石は老手也。

若山牧水氏著 — 第三編 —

■ 旅とふる郷

附録 ▼特製美本
旅の歌 ▼價五十五錢
(二百首) ▼送料六錢

▼中央新聞曰く、當代の歌人中最も素朴にして感傷的の感情を有する著者が小品文二十及び短歌等を集めたるものにて「山の變死人」以下「秋風題」に至る小品文は、氏の機巧なる筆致と温雅なる自然觀とを最も能く發表せる懐しき文章なり。旅の歌二百數十首は、著者の自然を愛する情の細かに盛り居れり。

曾て出てたることなき興味多き讀み物

文壇諸名家の面目躍如——文壇の裏面觀、側面觀也

■ 文壇名家書簡集

中版美本
價七拾五錢
郵送料六錢

現時文壇の名流の全部と、漱石綠雨四迷眉山等の故文豪とを併せて約百家の書簡を集めたるもの也。中には、讀賣新聞文藝部の招聘を謝絶せる故漱石の書簡の如き、自ら窮狀を述べ自らを嘲ける故綠雨の書簡の如き、はた中央公論記者に與へて中條百合子氏を推薦せる坪内逍遙氏の書簡の如き、文藝史料として尊ぶ可きものあれば、松魚俊子二氏の結婚に就き、規箴と祝意と合せ述べたる幸田露伴氏の書簡の如き、其人となリを見る可きものあり。興味之豊なるものには、師漱石に與へて鏤々千言、諧謔交りに其近狀を述べたる芥川久米兩氏の書簡あり。襟を正して讀む可きものには、藝術に専念邁往せん爲め家族を遠ざく可く決意せる谷崎潤一郎氏の書簡あり。正しく生きんが爲め人形細工に自活の途を求めんとせる田村俊子氏の書簡あり。其の他こゝに一々特記すること能はざるも、百人皆百様の面目を窺はしむ可きものゝみにして、文藝史の材料として、諸家自傳の一節として見る可きは勿論、まゝ文壇の裏面をさらけ出して讀者を驚倒せしむるもの少なからず。且つ百家の書簡、悉く未だ新聞にも雑誌にも曾つて出てざるものゝみなるの一事は、本書の大に誇りとするところ也。

相馬泰三氏著

長篇小説 荊棘の路

■第二版

大版四百四十頁
定價壹圓四拾錢
郵送料八錢

湘南三浦半島の一角に村居せる若き藝術家の群れを題材とせるものにして、現文壇一面の記録とも稱す可きほど新進作家の生活をさながらに描いて讀者の興味極めて豊かなる傑作小説也。量は八百枚に近き長篇、隨所に戀愛、人生等種々の問題を提出しつゝ作者の現代觀を語ると共に、文學と文學者との關係を痛切に見、描ける點に於いて、文學に志ある人の必讀せざる可からざるものなり。

久米正雄氏著

小説集 學生時代

■第二版

大版線布極美本
定價壹圓貳拾錢
郵送料八錢

曾て坪内逍遙博士は『書生氣質』を出して當年の文壇を震撼したりき。本書は實に大正の『書生氣質』也。收むるところ『受験生の手記』『書書』『密告者』『鐵拳制裁』等十數篇、主として作者が高等學校時代に遭逢せる幾情景を描けるものにして、作者の快潤なる氣稟と爽快なる筆致とを遺憾なく示せる其の代表的傑作選集とも稱す可く、東京の學生々活に愛着と憧憬とを有する人々は感興殊に深からむ。

志賀直哉氏著 パーナードリッチ氏裝幀

創作集 夜の光

(三版)

大版四百四十頁
價壹圓四拾錢
郵送料八錢

新進作家中の白眉たる志賀直哉氏の傑作選集である。最近文壇無比の名作として一世を動かすの觀をなした長篇「和解」を始めとして、近作の全部と「正義派」以下舊作中の粹を抜いて、收むるもの總て十有四篇。量よりするも短篇集中比ひ尠なき大冊であるが、若し其れ等の質に至りては、各篇皆不朽の名作、之を世界の文壇に持ち出しても毫も遜色を見ないと稱せられる。作者が非凡の天才を以てして、而も其の藝術的良心の鋭敏なるは、三十枚の短篇に刻苦月を重ねる事も稀でない。爲に作る所甚だ多からず、十餘年の藝術的生涯の全努力は、凝つて此の一卷にあると云つてよいのである。

史劇 項羽と劉邦

長與善郎氏著 (三版)

定價八十錢
送料六錢

白樺同人中スケールの雄大と筆致の豪健とを以て次第に其の頭角を抜いて來た長與善郎氏の現在に於ける代表的作品である。題材を漢楚軍談にとつてゐながら、それを十分自己の埒場の中に入れて、新らしき力と熱と命とを與へたものであつて、確かに新史劇の先驅として文壇の一面を十分威歴するに足るものである。(帝國文學評)

縮刷獨步叢書

文豪國木田獨歩の全集也

(1) 武藏野及渚	(2) 獨歩集	(3) 獨歩書簡	(4) 運命	(5) 濤聲	(6) 第二獨歩集	
〔武藏野〕は、獨歩が始めて公にせる第一の文集にして、不朽の名篇と稱せらるゝもの。〔渚〕は實に其の絶筆たり。	〔目〕富岡先生▼牛肉と馬鈴薯▼女難▼第三者▼正直者▼湯ケ原より▼少年の悲哀▼夫婦▼春鳥	獨歩の書簡數百通を收む。中に其情人に贈りて戀を語るもの最も多く、まさに熱烈なる戀愛書簡集たるの觀あり。	〔目〕運命論者▼巡査▼酒中日記▼馬上の友▼惡魔▼非凡なる凡空知川の岸邊▼非なる凡	〔目〕鎌倉夫人▼神の子▼少女▼帽子▼あゝの死▼別天▼音▼號外▼歸來▼遊會▼地▼戀を戀する人▼園遊會	〔目〕竹の木戸▼窮死▼疲勞▼節操▼二人▼泣き笑ひ▼都の友へ▼入郷記▼放り▼辱▲湯ケ原ゆき(附録二篇)	

布表紙天金製 ▶ 冊十六金 ◀ 送料八錢

新進作家叢書

新人競ひ起つて面目全く改まれる現下文壇の鳥瞰圖を示すべく新進作家中聲望最も高き人々を選び、其の自信ある作品を請ひ得て一卷となし以て本叢書を發刊せり。

1 新らしき家 武者小路實篤	2 恐ろしき結婚 里見 淳	3 生あらば 豊島與志雄	4 大津順吉 志賀直哉	5 生と死の愛 谷崎精二	6 結婚の前 長與善郎	7 暴君へ 有島生馬
8 煙草と惡魔 芥川龍之介	9 夢と六月 相馬泰三	10 手品 師久米正雄	11 一つの芽生 中條百合子	12 神經病時代 廣津和郎	13 愛と憎み 江馬 修	— 以下續々刊行 —

中版新裝 價四十錢宛 送料六錢宛

4901

金子薫園氏編 ■附録小品文作法■

■文章資料 小品文一千題

三發 ▼紙數四百五十頁
版賣 ▼定價五拾五錢
▼郵送料六錢

小品文を網羅すること一千篇。天上、地上、人事の三篇に大別し、更に之を數十の小項目に分類し、作文の際求むる所の題材を容易に發見するを得せしむ。小品文の文範たると共に、あらゆる文章の絶好資料たるもの也。尙ほ巻頭別に『小品文作法』及び『名家小品文例』を掲ぐる等、用意は飽くまで懇切を盡くせり。

新潮社編輯部編 ■附録紀行文辭典■

■ホケツト紀行文粹

再發 ▼紙數三百五十頁
版賣 ▼定價參拾五錢
▼送料四錢

文章の軌範として、又旅行の伴侶として、絶好無二のもの也。即ち明治大正の各作家の紀行文の粹を集むること七十餘篇。脚註を附して、多少の地理的説明を加へたれば、旅行案内ともなる可く、巻末に『新紀行文辭典』と云ふ便利此の上なき大附録あり。本はタケ三寸七分、横二寸七分の小形、ホケツトに藏して旅の友にするに宜し。

~~31~~
~~704~~ p. 5.6
WSP-2

終

